

「私も然う考へてをりますから、人物を描くことに致します。」

と欣び勇んで立去つたが、それよりは間がな隙がな、下圖の製作に心を注いで、十日の後、兎にも角にも出来上つた。そこで天聲に下圖を見せて相談した結果、二曲屏風一雙へ揮毫することに定めて、得意の經師家へ注文した。

優が描かんとする文展の出品畫は櫻花爛熳と咲き揃ふた庭園に、美しい令嬢が立つて、寫真を手にして眺めてをる圖で、題して面影といふのであつた。

「どうか立派に描き上げて、入選致たいものだがね。この繪さへ入選すれば、畫家として世に立つ根底が出来のだからね。」

と畫は第一中學に通ひ、學校から歸つた後と、土曜半日と日曜とは、全く出品畫のために全力を注ぐのであつた。

話變つて佐分誠也は、優から伯爵家を立退いた當日、書面も来る、伯爵家から電話で通知もあつたので、一時は驚いたものゝ、深い事情の在ることゝ、敢へて搜索

は致なかつたがしかし内々優の所在を捜すのであつたが、或時途中で偶然青山天聲と邂逅つたので、優の身を問ねて見たが、寺山は優から懇々頼まれてゐた爲に、自分の家に寄食させてあることは、秘して告げなかつたのみならず近時は繪の研究にも來ないから、何うしたことかと、密に心配してゐた旨を答へたために、佐分は絶望して、優の前途を陰ながら、幸多かれと祈るのであつた。

優が退去後の露香は、失望落膽の結果、暫時は何事も手に着かない程であつたがしかし進まぬながら、女學校へは通つてゐるけれども、以前のやうな生々した勢はなく、いつも物思しさうに沈むでゐた。

落 胤

公爵御室隆致は六十八歳の老齡に達して、この兩三年頗る壯健であつたが、この數日以前、曾て惱まされた腦溢血が再發して、一時は人事不省に陥つたから、名門

であるだけ、一家一門寄集ふて、有ゆる治療を盡した結果、漸くに人事を辨へるま
 ではは恢復したが、左半身が不随となつて、主治醫は勿論、専門の醫學博士が交々
 來診して、五名の看護婦は晝夜看護に盡してをるために、この數日來の公爵家は、
 朝野の見舞客が引も切らざる在様で、畏くも宮中よりも慰問の御使を遣されたほど
 である。それは公爵が長く内大臣としてお傍近く奉仕された、其忠誠に對せられた
 のである。

某日のことであつた。公爵は近親嵯峨公爵並に、嵐野侯爵と、家令の佐分誠之進
 を枕頭に招き寄せて、

「さて、貴下方を故々御足勞を煩はしたのは、餘の義ではありませんが、私も這回
 の病氣は、到底全快の見込がないのみならず、或は明日が計られないと思ひます
 ので、死後に紛争の起らないやうに、御室家の後事をお願い申して置たいと、それ
 がために御來邸を願つたのです。御承知の通り、私には不幸にして、家を譲るべき

嗣子がないので、今日までもなく、他より養子を迎へやうと考へた事もあり、勧め
 られた事もあつたけれども、それを實行致なかつたといふのは、私に深い秘密が有
 つたが爲です。それは他の事ではないが、私が寵愛してをつた新橋の小花家といふ
 内の抱藝妓、花吉との間に一人の男兒を擧げたが、其後妻は其關係を知つて、太く
 精神を惱してゐる頃であつたから、止を得ず其小兒は、花吉と相談の上で、他へ養
 子に遣つて了ふことにしたので、それは今より十七年の昔ですから、無事に生長
 してをれば、確かに十七歳に成つて居る筈です、私も其後遂に家を譲るべき一子だ
 もない爲に、せめては捜し出して、認知致さうと決心して、花吉を訪ねたところが
 彼女も私と關係を斷つて四年の後、病氣の爲に幽界の人に成つて、小兒を何れへ遣
 つたか、更に知る便がなくなつて了ひました。何とかして捜し出さうと思つて、色
 手續を求めて捜して見たけれども、到頭養子に遣つた先方が知れなくて今日に至
 つたのです。就いては貴下方に御願ひ申して置たいのは、佐分をして其小兒の所在

を捜索させますから、所在が知れまして、御室家を継がすべき資格が有りましたらば、どうか御相談の上、其手續が履行して頂きたいのです、若又其所在が知れない曉は、近親者の中から人格の高い者を選んで、養子として相續させて下さるやうに、呉々も御願ひ致します。」

と病氣の苦痛を忍んでいつた。

「貴方の御病氣は全快されることと思つてゐるけれども、それこれに拘らず、養子問題は御室家の爲めに決定して置く必要があると思ひますから、唯今お話の小兒の所在が判明して、幸に公爵家を継がすべき資格があれば、十分の盡力をもつて相續者と定め、萬一所在が知れない場合は、近親者の中から協議の上で繼承者を定めますから、それは必ず御心配に及びませんが、しかし其所在不明の小兒は、何うして御捜しなさるのです、十七年以前であつて見れば、容易に知れないと思はれますがね。」

と嵯峨公爵がいひ出した。

「御有理な御問ねですが、其小兒には私から二品の紀念物が遣はしてありますからそれを證據として捜索すれば、知れないことはあるまいと考へます。」

「して其紀念物といふは如何なる品ですか。」

「それは、一つは雪舟の描いた羅浮仙の密書で、今一つは關の兼光が鍛へた、七星亂の短刀であります、この二品が遣してありますから、捜したら知れやうと思ひます。」

「然ういふ無類の紀念品が在る上は捜して知れない事はないと思ひますから、それでは早速新聞へ廣告して、廣く知れ渡る手段を探るのですね。」

と嵐野侯爵がいつた。すると佐分誠之進が、

「捜索上の方法に就きましては、御家の御名譽に關らないやうに、何んとか手段を考案致しまして、早速捜索致しますから、御安心を願ひます。」

と答へた。

「どうか十分に捜して見て呉れ、それで何うしても所在の知れない場合は、止を得ないから、嵯峨さんなり嵐野さんへ御願ひ申して在るから、親戚中から適當な相續者を撰んで手續をするが宜い。」

「委細心得ましてございます。」

「御室さん、我々が御依頼を受けた上は、誓つて御室家の安泰を計りますから、必ず御心配なく、十分御静養なすつて、御全快を祈ります。」

嵯峨公爵が慰安を與へた。

「有難うございます、これで私も安心致しました。病床へ御招きして恐縮致しました。どうか別室に於て悠々御休息下さいませ。」

「長談は御病氣に障りますから、それではこれで失禮致します、どうか精々御加養なさるやうにお勧め致します。」

と嵯峨公がいへば、嵐野侯も、

「どうか御大切に願ひます、委細の相談は、佐分家令と別室で遂げる事に致します。」

「何分にも宜しく御願ひ致します。」

嵯峨、嵐野の兩名は、佐分家令と共に、公爵の病室を去つて、而うして別室に於て、搜索上の相談を遂げて歸つて往つた。

御室公爵の病状は進みもせず退きもせず、不動の病勢は保つて居るがしかし主治醫を始め、博士連は、決して安心は出来ないと注意するほどで、公爵家では、親戚方が寄集つて交るゝ看護其他に盡して居る。

佐分家令は、嵯峨、嵐野の兩人と相談して、先づ都下の各新聞へ廣告を掲げやうと、其文案を、伴の誠也に認めさせるため、家扶、家従の人々に、其旨を告げて我家へ歸つた。

時は既に黄昏近い頃であつたから誠也は外務省から歸つてゐた。誠之進は己が室

へ招いて、密々に相談するのであつた。

「お前氣の毒だが、新聞の廣告文を認めて呉れないか。」

「何の廣告文ですか。」

「實は恚ういふ理由で、廣告を出すのだから、どうか意味の能く通じるやうに、認めて貰ひたいのだ。」

と御室公爵と新橋の小花家の藝妓花吉との中に擧げた、男の兒の所在を搜索する旨を物語つた後、其小兒は既に十七年に成る事、公爵から記念として、雪舟の描いた羅浮仙の軸物、並に關の兼光作の短刀が與へられてある事など、詳しく物語つて聞かせた。

誠也は父の物語を靜に聞いて居つたが、聞了ると共に、

「其羅浮仙の掛物といふのは、何ういふ表装がしてあつたか、それはお分りにならないですか。」

「尺五絹本へ描いた極彩色の密畫で、表装は中が古金襴の唐草模様で、天地は緞子の模様入だと仰せられた。」

誠也は聞了るが否や、

「お父様、其掛物なら、捜すまでもなく持つて居る人を私が知つて居りますが、残念な事には、賊に盗まれて、目下其所在を捜して居ります。」

誠之進も驚いて、

「え、ッ、それは眞箇の事かね。」

「眞箇の事です。が、掛物の所在も知れませんが、當人の所在も知れないのです。」

「それでは何にもならないぢやないか、一體其人は何處にゐたのだ。」

と問ひかけた。

「其雪舟の羅浮仙の掛物を持つてゐるのは、外の人ではありません、伊藤家に厄介を受けてゐて、私の宅へも時々來たことのある、高木優といふ青年です。」

「はア、私も會つたことがあります。上品な顔をした、伊藤伯を救けたといふあの青年のことだらう。」

「あれです、あの青年です。」

「へえ、あの青年が其掛物を……どうして持つてゐたのでせう。」

「掛物ばかりぢやありません、短刀も持つてゐたのですが、十餘年以前神田の大火に焼いて了つたさうです。」

「へえ、してあの青年は幾歳になります。」

「年齢も十七歳に成りますし、新橋とかの藝妓が産んだ小兒を、産婆の世話で貰つたのださうですから、屹度あの青年が、公爵の落胤に相違無いと思ひます。」

「お前はそれを誰から聞きました。」

「優の養母お政が臨終の際に、優の前途を頼む爲に、詳しく物語つたから承知してゐるのです。」

「それは意外千萬な話だが、若し果してあの青年が公爵様の落胤であるとして、どうぢやらう、公爵家の相続人に護立てることが出来るだらうか。」

「御覽なすつた通り、風采といひ容貌といひ、下等社會の小兒とは思はれない氣品が備つてをりますのに、膽力もあり、義氣もあり、殊に才智に富んで、學業の成績も優等なら、繪畫は天才だといはれてゐるほどですから、今後の護立てやうに依つては、堂々たる公爵が出来ると思ひます。」

「すると、先づ第一に其羅浮仙の掛物を捜し出して、眞偽を確かめなければならないが、盗まれて了つては確めることが出来ないが、困つたものだね。」

「それも困りますが、それよりも肝心の當人の所在が知れないのに困ります。」

「何うして伊藤家を出たのかね。」

「その事情は、今日に至るも不可解ですが、何か深い事情があつたやうです。」

「すると先づ當人の所在を捜すと同時に掛物の所在を捜さなければならぬが、何

ういふ方法をもつて捜したら宜いだらうね。」

誠也は寸時考へてをつたが、

「當人は當時有名な寺山天聲の門生で、鳳聲と號してゐる位ですから、秘密に捜したら知れないことはないと思へますから、私が内々捜して見ませう。」

「愈よ高木優が、御落胤であるとするれば、御前様の御無事の中に、御親子の御對面を遊すやうに致たいと思ふから、官衙の方を一兩日御隙を願つて、捜索に奔走して見て呉れないか。」

「公爵家の安危に關する一大事ですから、それでは明日から奔走して見ませう。」

「すると先づ、新聞廣告は見合せませうね。」

「果して高木が御落胤とすれば、廣告する必要はないと思へますから、高木の方が判明した上で、若し相違してをつたら、廣告して捜すことにするが適當の手段と思ひます。」

「廣告は其上として、お前は其掛物を實見したことがあるかね。」

「實見致しましたが、實に美事な物でした、けれども念の爲に、私が添書して、寺山に眞偽を鑑定して貰ひに、當人が故々往きました、寺山が一千圓なら何時でも譲受けたいといつたさうですから、眞績には相違無いと思ひますけれど、其後間もなく下宿屋の二階に置いたのを、賊の爲に盗み去られたのです。」

「それでは何うも高木が御落胤に相違無いやうに思はれるね。」

「私も十中の八九まで、然うだと信じてをります、然う思ふと、彼の顔は、御前様に似たところがありますよ。」

と信するやうにいつた。

佐分誠也は、翌日先づ寺山天聲を其宅へ訪れた。取次に出たのは二十前後の書生であつた。

「先生御在宅でせうか。」

「はい誰方様ですか。」

「御面會致たい用件があつて伺ひましたから一寸御取次を願ひます。」
と名刺を出した。

「寸時どうぞお待を願ひます。」

名刺を手にして立かけた。

「それから一寸お問ね致しますが、高木鳳聲といふ人は、今でも此方へ参るでせうか。」
と問ひ試みた。

「高木君は、來られるどころではありません、近頃は此家に厄介に成つてをられません。」

「え、ッ、高木が此方へ……然うですか、して唯今お宅にゐるでせうか。」

「もう學校へ往かれて、唯今は不在です。」

「然うですか、左に右先生に御取次を願ひます。」

「承知致しました。」

書生は奥へ入つたが、問もあらず出て來た、

「どうかお通り下さい。」

案内に連れられて客室へ通つた。而うして待間程なく寺山天聲が入つて來た。

「暫時でしたね御壯健で結構です。」

と打解けて挨拶した。

「何しろ公務多端で、寸隙を得ないものですから、意外の御無沙汰しました。」

「しかし相變らず書書は御鑑賞なさるんでせう。」

「持つた病癖ですから、相變らず弄つてはゐますが、しかし御承知の條約改正係を命せられたものですから、本の相間々に弄る位なもので、殆んど手に入れた品は無いといつて宜い位です。」

「しかし條約改正も、大畧終了したやうに、新聞紙上で見受けますが、まだ濟まな

い國もあるのですか。」

「まだ未締結の國が二ヶ國ばかりありますが、しかしそれは餘り通商上の關係のない國ですから、遅れても差支へないのですが、早晚批准を経る事に成つてゐますから、殆んど完結したといつても宜い位なものです。」

「それは御安心ですね、これからは叙勳といふ樂みをお待になるばかりですからねはゝは。」

「勳四等位では、餘り榮ないですよ、はゝゝ、時に妙な事を聞きましたが、私が入門を紹介致しました、伊藤伯爵家にをりました、高木優ですがね、突然伊藤家を去つて、踪跡を晦まして了ひましたので、日外御問ね致しましたら、此方へ參らないといふ御返辭を承つたものですから、何方へ往つたかと、内々心配してゐましたところですが、近頃は先生の宅へ參つて御厄介に成つてゐるさうですね。」

と問ねた。

「實は御問ねに成つた時から、私の宅に来てゐたのですが、どうか伊藤家なり貴方なりから御問合せがあつても、ゐないと挨拶して呉れと、當人から頻りに頼むものですから、それで然う申し上げたのですが、少々事情があつて、伊藤家を去らなければならぬが、忽ち糊口に困るから、當分でも宜いから玄關に置いて貰ひたいと頼みますので、他の門生と異つて、將來に望を囑してゐる門生の事ですから、それは家に來てをるが宜いと、學校に通はせながら、繪畫の研究をさしてをります。」

「それはとんだ御厄介を願つて恐縮致しました。何にも伊藤家を出るやうな事情はなかつたのですが、何を感じて去つたものだから、今日に至るも其原因が知れないのですが、私は彼の母なる人から、一身を托されてゐるものですから、内々心配してをりましたが、それを承はつて安心致しました。が、何ういふ事情で伊藤家を去つたのか御存じございませんか。」

寺山は聲を密めて、

「それは當人から聞いては居りますが、秘密にして呉れと頼まれてゐますから、他の人ならば秘して置くのですけれど、高木に縁故の深い貴方の事ですから、御話は致しますが、何うか秘密として御聞願ひします。」

「委細承知致しました。」

「高木が伊藤家を去つたのは、同家に高木と同年代なお嬢様があるさうですが、其お嬢様から戀を訴へられて、いくら事情を説いて拒絶しても、承知致なければ自殺するといふ、手強い談判を受けたので、戀を承知すれば、當人の希望は満足するけれども、それでは多年恩顧を受けた伯爵なり、伯爵家へ紹介して貰つた、貴方へ對して不忠不義の人に成るから、自分が身を隠すが、何よりの好分別と考へて、遂に濟まないとは知りつゝ、無斷退去して了つたといふのです、私も他の我儘から伯爵家を出たのなら、飽まで説諭を加へて謝罪させる考へであつたのですが、事情を聞いて見ると、同情すべき點があるのみならず、寧ろ現時の青年としては感ずべき

點があると思つたものですから、秘密を秘密として、玄關に置く事にした次第です。」と物語つた。

「然うですか、然ういふ事情で伯爵家を出たのですか、成程事情を聞いて見ると同情すべき點がありますね、ところで先生の彼に對する將來の御見込は如何でございませう、書家として一家を成す事が出来ませうか。」

「今日の儘で研究を續けて往けば、中學を卒業する頃には、美術學校へ入らずとも確に一家を成す事が出来得ます。」

「實は今日伺ひましたのは、私が添書を致しまして、高木が御鑑定を願ひに上つた筈の畫幅に就いて承はりたい事があつたものですから、それが爲に上つた理ですが、確か今より四年以前の春だと記憶して居ります、高木が雪舟先生の描かれた羅浮仙の掛物を持つて居て、御鑑定を願ひに上つた筈ですが、御記憶がございませうか。」と問ひかけた。

「在ります、在ります、あれは雪舟としては珍らしい密書で、眞蹟に相違無いと認められたものですから、若し手放すならば、千圓なら何時でも譲受るといつた程でしたが、聞けば下宿屋で賊の爲に盗まれたさうですが、實に惜い事をしたものです。」

「賊が持去つたさうですが、惜い事を致したものです。致しますと、眞蹟に相違無かつたでせうか。」

「それは私が保証致します、確に雪舟の眞蹟に相違ありません。」

「然うですかね………」

「あの軸が何處かに在たのですか。」

「いえ所在は知れないのですが、あの軸物に就いて是非調べなければならぬ、重大な事件が起つたのです。」

「へえ、重大の事件と仰やるのは、高木に何か疑はしい事でもあるのですか。」

「いや高木に疑はしい事は少しも無いのですが、事に依ると高木の一身に破天荒の幸福が向つて來は致ないかと思ふのです。」

「それは又何ういふ理由です。」

「これこそ絶対秘密を要する事ですが、高木が御厄介に預つて居る深い縁故がありますから、内々お耳に入れて置きますけれど、虚實が判明するまでは、絶対秘密に願ひます。」

「誓つて秘密を守ります。」

「實は恚ういふ事情です。」

「とところが、其落胤といふのが、母なる藝妓が死去してをるために、何處へ何うしある顛末を語つた。」

たか所在が知れなくなつたのですが、無事に育つてをれば、本年十七歳に成るといふのです、其處に於て私の胸に浮んだのは、高木の身の上です、彼は高木政なる者が、或産婆の世話で、生れたばかりの嬰兒を貰ひ受けて名をも優と附けたことが、明瞭してをりますのに、今年十七歳である上に、公爵から記念として與へられた、雪舟の羅浮仙の軸物を所持してをるのみならず、短刀を持つてゐたのですが、それは神田の大火に持出すことが出来なくて、焼いて了つたと、彼の母から直接に聞いてをるものですから、事に依ると高木が公爵の落胤ではあるまいかと思料したものですから、先づ軸物の眞偽を先生に承つて、眞蹟であるとすれば、絶対に其所在を捜したいと思ふのです。」

と打明けた。寺山もこの意外な物語を聞いて、非常に興味を起して、

「なるほど、それは興味のある問題ですね、しかしあの雪舟は公爵家からでも出なければ、普通の家に在るべき品ではありませんから、これは物に成りさうですね、

何故かといふに、高木の容貌風采が、何處となく貴公子らしい點があるのに、年齢も十七で、才智も優れてゐるですからね。」

「私も然う考へたものですから、實際高木が落胤で在ると極れば、當人の幸福は無論ですが、公爵も非常に歡ばれるであらうと思ひますし、殊に私の父が公爵家の家令を勤めてをりますから、其搜索方を命令されてをりますので、旁々御問ねに上つたのです。」

「高木の爲には非常な福音ですから、私も共々捜して遣つても宜いですが、あの雪舟は他に類がないですからね。」

「どうか精々御注意を願ひます、しかしこのことはどうか高木へ絶対秘密に願ひ致します。」

「承知致しました、事實の判明するまでは、秘密に致した方が宜いですから、決して何人へも話さないで置ます。」

かゝる折柄へ塾生が来て、

「新宿の濱野さんがお入来になりました。」

「然うか、此方へお通し申せ、もう必要な話は済んだのだから……」

「はい。」

と書生は立去つた。が間もなく立派な紳士が入つて来た。この紳士は名を茂馬といつて、新宿大盡と呼ばれた富豪で、寺山とは非常に親しく交際してをる人である、年齢は五十二で、赭顔の眉目の洞然とした、大兵肥満の好漢である。

「不在かも知れないと思つたが、面白い物が手に入つたので、君に鑑定して貰はうと思つて来たのだ。」

「又偽物ぢやないですか。」

寺山は笑ひつゝいつた。

「出た先方が好いから、大抵眞蹟であらうと思ふのだ。」

「お持でしたか。」

「持つて来たから早速見て貰はう。」

「新書ですか。」

「何うして、最も古い物だが、しかし垂涎するほどの密書だ、玄關脇に置たから、一寸書生を呼んで運ばして呉れ給へ。」

寺山は書生を呼んで、それを運ばした。而うして手づから開きかけたが、ツト眉を顰めて、佐分の顔を見た。けれども佐分は何の意味とも解し得なかつた。半ば開きかけた時、濱野は快げに笑を湛へて、

「落款を見ずに、鑑定して當つたら今夜新橋でも柳橋でも、君の望の場所を奢ると致やう。」

「宜しい、外れたら貴方の望の書を描いて差上げること、當つたら私の望通りの藝妓を招んで遊ぶこと。」

「それは尙更面白い。」
佐分は興を覚えて笑ひつゝ聞いてゐた。

雪舟の軸物

寺山は展きかけた軸物を、落款だけ残してくるくくと展いた。而うして再び佐分と顔を見合した。佐分は其軸物を見ると、顔色の變るまで愕いた。寺山も意外に感じつゝ、熟と書面を眺めてをつた。

「どうだ、有繋の畫伯もこればかりは鑑定に苦むだらう。」
と濱野は得意然としていつた。

「成程珍らしいものです、この人の筆にこれほどの、密書も少いが、恁ういふ圖も稀です。」
といつた。

「えゝツ、それでは君解つたのかい。」

「鑑定違ひかも知れませんが、雪舟先生と見ましたが、如何です。」

笑ひつゝいつた。濱野は吃驚して、

「へえ………驚いた、君は神様だ、有繋に畫伯だけある、眞個敬服した、何うして

雪舟と解つたかね。」

「はゝゝ、餅は餅屋です。」

「だつて雪舟に恁麼異つた密書は殆んど無いといつても宜い位ぢやないか。」

「然うです、私もこれで三幅見ましたが、眞個珍品ですね。」

「何うだ何程ばかりの價值があるだらう、評價して見て下さい。」

「然うですね、貴方の事ですから、二千圓もお出しなすつたでせう。」

「二千圓！ 可愛相な事いつてるね、雪舟の密書が二千や三千で買へるなら、幾幅でも買ふから御願ひ致たいものだね。」

「それでは三千もお出しなすつたのですか。」

「三千の倍額五千圓さ。」

「五千圓は少々高價過ますね。」

「けれども五千圓の金子は手に入るが、雪舟の美術は、容易に手に入らないからね高いといへば高いが、考へて見れば安いものさ。」

「ところで、恚ういふ結構な品を、何方からお手にお入れでしたかな、黒人筋ですか。」

と問ひ試みた。

「何有、勘解野伯爵が、負債整理の爲に、愛好の美術品を、内々賣却されたので、其中から掘出したのさ。」

「すると勘解野家に傳來の品でせうか。」

「私も然うだと思つて聞ねて見たところが、四年以前とかに、博物館の美術係をし

てをる、阿部といふ人が勧めに来て買ったのだと話してゐられた。」

「へえ然うですか、阿部君の手から……何處から恚ういふ品を手に入れたでせう容易に手に入るべき品ぢやないんですかね。」

「矢張華族家からでも出たのでせう、ところで表装と箱とを新しく致やうと思ふがどんなものでせう。」

「箱も古びてはありますが、雪村の鑑定書がありますから、この儘洗はした方が、一層價值を高からしめると思ひますし、中は無論此儘が宜いと思ひます、まだ装訂を改めなきやならないほどの、汚れも破損もないですからね。」

「然うかね、それでは箱洗だけさして、此儘所藏するんだね。」

「掛け得られないやうに成ればですが、さもない限りは此儘に限ります。」

「それは君の意見に任せるとして、何うだ鑑定料の契約を實行するが、これから出かけやうぢやないか。」

促すやうにいつた。

「結構ですね、何時でも出かけます、今日是我輩に最大の権利があるんだからね。」

「それでは本陣を選び給へ。」

「新柳二橋よりも、池の端邊も興趣が深いと思ひますが如何です。」

「いづれなりと、本陣の選定は君に一任するさ。」

「それでは、臨波樓を本陣として、私はお後から直に参りますから、一步お先へ……」

濱野茂馬は寺山と約して、意氣揚々と歸つて往つた。後で寺山は佐分と顔を見合して、

「如何です、不思議な事もあるものですね、賊難に遭ふて所在が知れなくなつた搜索品が、折も折、時も時、私の宅へ再び鑑定に持つて來るといふは、高木が世に出る前兆かも知れないです、餘りの意外に、胸が潰れました。」

「私も掛物をお擴げに成つた時は、覺えず胸に鼓動を覺えました。一體あの方は誰方でせうか。」

と佐分が問ねた。

「あの方は新宿將軍と謳はれた、濱野茂馬といふ紳士ですが、非常な美術好で、年中書畫骨董を買集めて楽しんでゐるのです。」

「唯今の御話に依ると、阿部といふ人から、勘解野伯へ賣渡したといふ事でしたがして見ると、阿部といふ人に會つて、出所を問ねたら、何人の手から出たか、直に分ると思ひますが如何でせう。」

「然うですね、實物の所有者が知れたのですから、誠に好都合ですが、無論盜難届は出してあるでせうね。」

「それは其當時私が勸めて出させましたから確に出てをる筈です。」

「それならば、阿部に問ねるよりも届出がしてある警察へ往つて、斯様々々と密

告して、警察の手で捜さしては如何です。」

「成程それが手数も要らず、搜索上にも便利ですね、それでは早速芝警察署へ往つて、高木の代理者となつて密告して置ませう。」

「實物を見たのですから、彼場で事實を打明けやうかと思ひましたが、それでは却つて何彼に都合が好くあるまいと思つたものですから、濱野君の手に在る以上、大丈夫だと思つたものですから、御相談の上で、方法を講じやうと、故と差控へました。」

「あの軸物が出た以上、一日も早く實物を公爵の御目に懸けて、相違無いといふ事であれば、高木を連れて往つて、面會させやうと思ふのです。私の考へでは、十中の九まで高木が公爵の落胤に相違無いと信じて居るのですから……」

「すると愈よ公爵が認知されると、御室家の相續者に成る譯ですね。」

「不幸にして、奥方に御一人も御子様が無かつたのですから、公爵の血を享けた者

は、其小兒より無いのですから、其筋へ内々交渉した上で、相續者とする外ないのです。」

「伊藤家や、寺山家の食客が、一躍公爵家の御主人公に成つたら、それこそ天下の奇蹟ですね。」

「眞箇それが事實になれば、天下の奇蹟です、人の運命ほど計られないものはないですね、それでは私は失禮して、これから芝警察署へ参りますから、何分にも御盡力をお願い致します。」

と佐分は別を告げて歸つて往つた。而うして其歸るさに、芝警察署へ立寄つて、署長に面會した。

「私は外務省の書記官を勤めて居る、佐分誠也といふものですが、今より四年以前の春だと記憶して居りますが、私が保護してゐた高木優といふ少年が、芝櫻田本郷町の倉田重吉といふ家へ下宿して居る節に、賊のために、雪舟の描いた羅浮仙の掛

物を盗まれましたので、其當時早速盗難届を出して置きましたが、遂に今日まで知れなかつたのですが、今日計らすも、其掛物を見附けましたから、出所を問ねましたところが、勘解野伯爵家から買受けたといふのです、しかるに、其勘解野家では帝室博物館の美術係をしてをる、阿部恒忠といふ者から、買受けたといふ事まで確めたのです、ですからどうか其阿部を取調べて下さつて、何者から手に入れたかを御詮議の上、速かに現品が本人に返るやうに御取計ひが願ひたいと存じまして、御願に出頭致しました。」

芝警察署の署長澤村警視は、佐分の訴へを靜に聞いてをつたが、

「して其掛物は、何者の手に入つてをりますか。」と問ひかけた。

「目下は新宿の富豪濱野茂馬といふ人が、勘解野伯爵から買受けて所持してをります。」

「價格は凡そ何程ばかりの品です。」

「盗難届には、確か壹千圓と記してあるやうに記憶してをりますが、時價は三四千圓の品でございます。」

「して其被害者は當時何れにをりますか。」

「被害者高木優は、當時小石川關口町の寺山天聲といふ書家の宅にをります。」

「委細承知致しました、早速盗難届を調べさせて、探偵に従事させることに致ますから、知れ次第御通知することに致ませう。」

「御手数敷恐れ入りますが、何分にも宜しくお願ひ致します。」

と懇々頼んで置いて、我家を差して歸つた。而うして御室公爵家にをる父誠之進へ電話をかけて、公爵の病勢を問ねると共に、落胤の所在が畧知れた旨を告げた。すると間もなく公爵家から、自働車をもつて迎へに來た爲に、直に公爵家へと赴いた。先づ家令の控室へ通つて、父誠之進に面會した。父誠之進は襖をひたと閉め切つ

た後、

「先刻の電話を、御前様へ御聞に入れたところが、詳しい容子が聞きたいから、直にお前を呼べと仰るので、それが爲に迎へに遣つたのだか、どうだ眞箇御所在が知れたのか。」

と問ねた。

「先づ十中の七八までは確實らしい者が知れましたから、紀念の品を手に入れた上で御前様の御鑑定を仰ぎたいと思つてゐるのです。」

「しかし、明日をも知れない御病氣だから、悠々とはしてゐられないから、兎に右御目通りして、搜索の一伍一什を御話申し上げるが宜い。」

「それでは御面會して詳細を申し上げませう。」

と誠之進と共に公爵の病床へ往つた。而うして看護婦を始め、附添人を一時遠ざけて、密に物語るのであつた。

「御苦勞ぢやつた喃、誠之進から聞けば、伴の所在が畧知れたさうぢやが、私の容態は今夜が計られないのだから、一時も早く實否を確めて、安心して死にたいと思ふので、迎へに遣つたのぢやが、何うしてそれが知れました。」

と、公爵は青褪めた顔に、幾分の勢を見せて問ひかけた。

「實を申し上げれば、恚ういふ次第です、今より丁度五年以前の冬のことでございます。某日私が外務省から歸りかけますと、虎の門の電車停留場に、目今妻にしてをります由縁と、妹の露香とが、停留場に立つてゐて、私の姿を認めるが否や、頻りに招きますから、急いで往きますと、新聞賣の少年が仲間の青年に毆打されて悲鳴を上げてゐるから、早く救つて遣つて呉れと申すのです、見れば成程十二三の少年を十七八かとも見える青年が二三人寄り集つて、打つやら蹴るやら、亂暴を働いてをりますから、直に飛込んで救ひ出して遣つたのでございます。而うして漸次其の仔細を問ねて見ますと、其の少年は、名を高木優といひまして、病氣の養母を抱

へて、孝養を盡してゐることが府知事の知る所となつて、賞與を頂いた、其頃新聞紙に記されてゐた、孝子といふことが分つたのでございます。而うして其打擲された原因は、其少年が新聞賣に出ると、誰も彼も少年の新聞ばかりを買つて、他の者が賣れない所から、迫害されたことが分つたのでございます。其處で私始め、由縁も幾分宛の金子を與へて、家へ歸して、其日は別れて了つたのでございます。公爵は病氣の苦痛も忘れたやう、熱心に耳を傾むけてゐる。誠也は其容態を氣遣ひながら、尙も辭を繼いだ。

「其後少年の姿が見えなくなりましたので、病氣にでも罹つたのではないかと、聞いてゐたのを幸ひ、程遠からぬ、少年の宅を訪れて見ますと、病氣の母が、既に死に瀕して、苦悶してゐる折柄でしたから、去るにも去られず、少年を醫士の許へ走らせて、私其間の看護をして遣るといふ、奇しき因縁に捉へられたのでございます。其時病人が私へ對して少年の將來を、涙ながらに托して、且つ申しますには

この少年は自分の眞實の小兒ではなく、自分には太郎といふ、宅にをれば、もう二十歳になる、男子が在つたのですが、六歳に成つた歳の暮に、遊びに出たまゝ、行衛が知れなくなつて、何う搜索しても、到頭分らなかつた爲に、遂に他から小兒を貰て育てる事に、夫婦相談してゐる折柄へ、知合の産婆が來ので、小兒の欲い話をしたところが、それならば、丁度産れたばかりの、それは、可愛い男の兒を遣たいといふ方があるから、貰つては何うかと勧められて、其の産婆の世話で貰つて育てたのが即ち孝行少年であると物語つたのです。そこで私から、少年の將來に就いては、及ぶだけの世話はして遣るが、しかし少年の實父母といふのは、何をする人で、當時何處にゐるのかと問ねましたら、實父の名は御身分の在る方ではいれないし、母親は藝者稼業だけけれども、これも秘密といふ事に成つてゐるから、眞箇の親知らずといふ事で貰つたけれども、父親の紀念として、金襴の袋に入つた短刀と、桐箱に入つた軸物とが添へてあつたけれども、神田の大火に類焼して、短刀は焼い

て了つたけれども、掛物だけは小兒の寶物だから、貧苦に暮しながらも今に保存して持つてゐると、出して見せたは雪舟の筆に成つた、羅浮仙の圖で、誠に結構な品でございまして、ところが、病母は遂に歿しましたので、少年は私が外務省の大臣附の給仕に世話をして遣りまして、櫻田本郷町の某家の一室を借りて、下宿さして置きました。この少年が美少年である上に、非常な伶俐な性質でございまして、御記憶もございませうが、條約改正に反對して、刺客が大臣を暗殺に來た際に、一身を抛つて大臣を救けましたので、それが爲に負傷して入院して居ましたが其不在中に、下宿屋に置いた紀念の軸物を賊のために盗み去られて了ひましたから、其時直に届けさせましたけれども、今日に至るまで到頭知れなかつたのです、其後少年は病氣が全快して歸つて參りましたが、大臣が恩人として、引取つて中學に入れてお遣りに成つて、傍ら寺山天聲といふ畫家へ師事して、畫を學んでをりました。學校の成績も優等なら、畫の方も寺山門下の俊才といはれるほどの敏腕で、前途頗る

有望であつたのですが、本年の春何を感じたが、突然伯爵家を、無斷家出して所在を晦まして了ひましたから、随分方々を捜しましたが、遂に知れなくて今日まで過ぎ去つて了ひました。しかるに父から御落胤の搜索を命ぜられまして、紀念の品を聞きましましたところが、雪舟の羅浮仙の圖と承はつて、不斗胸に浮んだのは、高木優が盗み取られた、雪舟の羅浮仙の圖でございまして、のみならず、短刀も在つたと聞いてをりますのに、彼の年齢も丁度十七歳でございまして、實父は御身分在る方で母は藝妓だと知つてゐるものですから、若しやと思ひまして、一度其掛物を鑑定して貰つた事がございまして、寺山を訪れて眞蹟か否やも問いて見たり、高木の所在が知れせんかと今日先づ寺山を訪問致したのでございまして。」

公爵はいつしか青白んだ顔に、心ばかりの紅味を泛べて、

「それは不可思議ぢや、それから何うした其少年の所在が分つたか。」

「はい、高木から秘密にして呉れと頼んだ爲に、家出當時寺山へ問合せた際は、知

らないと申してゐましたが、今日聞いて見れば、伯爵家を出ると同時に、寺山の宅へ引移つて、相變らず學校にも通つてをれば、繪畫も熱心に研究してをるさうです。」

「して連れて来て呉れたか。」

と公爵は我兒と極つたやうにいひ出した。

「學校に往つて不在でもございますし、まだ確然とした紀念の品が無いのでございますから、召連ては参りませんでした。不思議な事から賊に盗まれた雪舟の掛物が、今日所在を發見致しましたから、茲一兩日中には、必ず高木の手に戻るであらうと考へますが、唯困る事には、既に第四者の手に移つて、非常な高價に買買されてをりますから、法律上賠償致なければ、高木の手に戻らないかと存じます。」

「何とかして、一時借りて見る事は出来ないか知ら……」

「御前様は御覽に成れば御記憶がございませうか。」

「記憶してをる、古うから傳承した品だから喩。」

「其掛物は、某者の手から、勘解野伯の御手に入りまして、それから又新宿の濱野といふ紳士の手に移つてをりますが、實は其濱野といふ人と、寺山畫伯とは、非常な親交があると見えまして、今日も濱野君が私の往つてをる時、掛物を持つて来て鑑定して貰つたのですが、その書を見ますと、偶然といひませうか、神の引合せといひませうか、それが私が尋ねに往つた雪舟の羅浮仙の掛物であつたものですか。寺山君も私も覺えず顔を見合せて、其奇縁に驚いたのです、ですけれども、濱野君へは何んにもいはずに、寺山君の方も事件の落着するまで秘密を守つて貰ふやうに頼んで歸りましたが、至急に御覽遊ばしたいと仰せられますならば、寺山君を煩はして濱野君から半日借りて来て貰ふより致方は無いと存じますが、如何致しませうか。」

と意見を叩いた。

「私の病氣が旦夕が計られないのだから、生前に相續者を極めて置いて安心して死にたいと思ふから、借り得られるものなら、早速借りて来て欲しいのだ、萬一だ貴重な品だから貸與する事が出来ないといはれた場合は、止を得ないから、寺山書伯に盡力を頼んで、相當代價で譲つて貰ふ外ないから、其邊はお前が臨機の處置を採つて左に右現品を一時も早く見せて貰ひたい。」

「畏りました、左様なら、これから自働車を拜借して、寺山書伯を訪ねて相談して参りませう。」

「金銭に換え難い證據品だから、運動費を要するなら誠之進と相談した上で、いくらなりと持つて往つて、願くば今日中に手に入れて貰ひたいものだ。」

「畏りました、左様ならば、これから今一度訪問して、相成るべくは現品を手に入れて歸るやうに取計ひます。」

と病室を去つて、父誠之進と打合せをした後、若干の運動費の用意をして、再び寺

山家へ自働車を飛ばした、時はまだ午後の三時頃であつた。門内へ自働車を乗入れると、今し一臺の自働車に、寺山が乗つて、外出致やうとする刹那であつた。

「御出かけ先を妨げては、甚だ恐縮千萬ですが、十分間だけの面談が御願ひ申したいですが、御都合は如何でございませう。」

と佐分が訴へた。

「何有濱野君から電話がかゝつて、遊びに出かけるのだから、差支へありません。」

寺山は自働車から降りて、佐分を客室へ伴ふた。

「何ういふ御用談です、いづれ先刻の一件でせう。」

と問ひかけた。

「御推察の通りです、あの歸るさに芝警察へ寄りました、阿部君が何人から手に入れたのか、それを搜索して貰ふやうに、署長に會つて頼んで歸りまして、公爵家へ電話をもつて、一道の光明を得たと知らせましたところが、直に來て呉れといふ迎

を受けましたので、早速参邸すると、公爵の病勢が旦夕をも斗られないから、片時も早く探り得た結果を、直接に御話せよといふ、父の辭に、公爵の病床に通つて高木に對する一伍一什と雪舟の畫幅に就いての物語を致しましたところが、然ういふ證據の品を持つてをるからには、屹度その青年が落胤に相違無いと思ふが、しかし由緒正しい公爵家を譲るのであるから、決して輕卒の事は出来ないから、紀念として與へて置た、雪舟の畫幅を見て、それが果して自分の與へた品であつたならば、年齢其他符合する點が多いから、認知して相續者と決定して置たいから、何よりも早く雪舟の畫幅が見たいから、相當代價で買戻しても宜し、それが不可能ならば、一時で宜いから濱野君へ事情を告げて、拜借して呉れといふ、公爵の熱望なのですけれども私は今日此方で御目に懸つただけの知合で、深い交際がある譯でないからそれでは寺山畫伯へ相談して、畫伯を煩はして、一時拜借して貰ふことに願つて見ませうと、再び御訪ねした次第ですが、貴方の御盡力をもつて、譲つて貰つても宜

し、それが不可能なれば、半日はかり公爵が實見される間御拜借して頂くことは出来ないのでせうか、如何でせう。」
と相談した。

「そんなことなら、雜作のないことです、私から事情を話せば、快く承知して下れますから、それではこれから御一緒に、池の端まで往きませう、而うして私が借りて貴方へ御渡しすることに致します。」

と快く承諾した。佐分は非常に喜んで、

「然うですか、それはどうも有難うございます、公爵家としては浮沈に關る大事件ですから、何分にも宜しく御盡力の程を願ひます。」

「それでは直に同行致ませう。」

と、各自々働車に乗つて、池の端の臨水亭へと急いだ。間もあらず到着したが、濱野は既に藝妓數名を侍らして、寺山の來會するのを遅しと待受けてゐた折柄であつ

たから、直に案内されて室へ通された。

佐分は寺山と相談の上、別室に於て、結果如何と待受けることにした。

寺山は藝妓共がをるために、濱野を別室に伴ふて相談するのであつた。

「御相談といふのは、餘のことではないのだが、今日拜見した雪舟の軸物ですがね故あつて御室公爵が是非拜見致たいから、二三時間拜借方を願つて呉れと、懇々頼まれたので、私は引受けて家臣の人が自働車で一緒に来て待つてをるのですが、三時間の後には此處へ御返しに来ることに致しますから、どうか拜借さして下さらないか。」

と頼んだ。

「君が中介でもあるし、相手が御室公爵だから、二時間や三時間なら御目には懸けるが、一體何がためにそんな性急に見たいのだらう。」

「公爵は非常に古書が好でゐらつしやるのに、就中雪舟憧憬者でゐられるから、そ

れがためではないかと、思ふのだ。」

「左に右幸ひ携帯してをるから、御見せするけれども、此處にをる中に返して貰ふやうに、君が引受けて下れなくちや困るよ。」

「それは私が責任を以つて引受けます。」

寺山の盡力に依つて、雪舟の軸物を借受けた佐分誠也は、寺山へ禮を述べ、臨水亭へも何程かの茶代を置いて、歡び勇んで公爵家へ歸つた。而うして直に公爵の病室へ通つた。待佗びてゐた公爵は、懶げに佐分を見遣りつゝ、

「首尾は何うぢやつた。」

「はい、寺山書伯の盡力で、三時間といふ約束で拜借して歸りましてございます。」

「然うか、それは御苦勞ぢやつた喃、その軸物が御室家に取つては、浮沈の定る大切な證據品だから、早速南縁の明い場所へ出て一見する事に致やう。」
と病軀を厭はず起上らうとした。傍に附添ふてをつた家令の誠之進は、

「御静安をお保ち遊ばすやうに、主治醫から懇々注意されてをりますから、御病床に於て御覽遊ばさるやうにお勧め申し上げます。」

と注意した。
「然うか、それならば一見する間、障子を開けて下れ、記憶のある品だから、一見すれば直に知れるであらう。」

「畏りました。」
と障子を開けた。同時に件の掛物を、誠也が進めた。公爵は先づ箱を手にして、仔細に眺めた後、中から掛物を取り出して、床の間へ懸けさせた、而うして熟と瞻めてをつたが、

「これだ、これだ、此品に相違ない、私は表装でも仕直して在るかと思つてをつたが、これは私が與へた當時の儘である。一點疑を挟む所はない、恨らくは今一品の短刀が無いけれども、出火の際焼失したと分つてをる以上、この一軸をもつて證

據とする外はない、この一軸に就いては、いづれ警察の方で處置する事と思ふから一先禮を述べて返して呉れ。」

といとも満足さうに見えた。

「委細承知致してございます、三時間といふ刻限で拜借致しましたから、これから直に返却して参ります。」

「就いてはぢや、かゝる證據のある上は、その高木優こそ私の伴に相違ないと思ふが、尙一つ念の爲に確めて貰ひたいのは、其小兒を周旋して呉れたのは、確に産婆であつたと記憶してをるから、何といふ産婆であつたか、新聞にでも廣告して、其産婆を捜して見て呉れないか。」

「其産婆の名前は、確か高木は母親から聞いて承知してをる筈でございます。」

「それならば、何故産婆を尋ねて、實父母を捜さなかつたのであらうか。」

「それは無論捜したさうでございませうけれど、何に致しましても、十三や十四の少

年が、二三の産婆に聞合せて見た位なもので、十分に搜索した理ではないであらうと存じますから、それが爲に知れなかつたのだと存じます。」

「高木が承知してをるのなら、尙更もつて好都合であるから、其名前を聞いて、早速各新聞へ廣告するか、さもなければ私立探偵社へ依頼して、各區役所に就いて、管内で開業してをる産婆を取調べさせて見れば、遅くも明日中には知れるであらうから、高木に聞いて、今日中に其手續を履んで呉れないか。」

「承知 仕りました、費用さへ抛てば明日の午前中には知れる事と存じますから、一方私立探偵社へ依頼すると同時に、一方各新聞紙へ廣告する事に致しませう。」

「萬事はお前等に一任するから、いづれにしても明日午前中までと、時刻を限つて捜さして呉れ。」

「畏りましたとぞいませう。」
かくて誠也は雪舟の一軸を持つて、再び下谷池の端なる臨水亭に往つて、寺山に

逢ふて軸物を返戻すると共に、寺山を頼んで、電話をもつて高木から産婆の名を聞いて貰つて、別を告げて返つた。

尋 人

寺山と別れた佐分誠也は、歸途自動車を京橋日吉町の大日本探偵社へ飛ばして、探信主任の三枝光吉と面會した。

「突然ですが、至急に搜索して貰ひたい事件があつて御願ひに來しましたが、報酬は御希望通り差上げますから、大々的活動をもつて、是非明日の正午までに取調べて頂きたいのですが、御引受け下さいませうか。」

先づ佐分が條件を提出した。

「困難な事件でなければ、御條件通り、必ず探査して御報告申しますが何ういふ事件でせう。」

「岩田竹子といふ産婆の所在が捜して貰ひたいのですが、唯困るのは今より十七年以前に産婆をしてゐたもので、其後引續いて開業してをるか、廢業して了つたか、それとも死亡して了つたか、杳として消息が知れないのです。」

「十七年以前……随分古い話ですね、其頃何方で開業してゐたか、それは御存じでせうか。」

「それが全然知れないのですが、唯私の想像を述べますと、其頃新橋の某藝妓が妊娠して、其産婆に關つてゐた事實があるのですから、京橋、芝、麴町といふ、新橋へ近い所に開業してゐたのではあるまいかと想像するのです。」

「成程、して見れば何れ御想像通り、餘り遠くではなかつたらうと考へますから、十分に探偵を遂げて有無の報告を、明日正午までに御報告する事に致します。」

「就いてはです、規定の報酬以外の明日正午までに所在を知らして下されば、特別報酬として百圓だけ差上げる契約をして置きますから、敝院の探偵を派して、十分

に御搜索を願ひます。」

「承知致しました、十中の八までは御委託を空う致ない考へですから、御安心を願ひます。」

「それでは規定の御報酬だけ差上げて置きますが、何程差上げませう。」

「定期探偵は比較的報酬率が高く成つてをりますが、其上特別探偵として、大々的活動させますから、三十圓だけ御支拂ひを願ひます。」

「それから、探偵の結果はこの名刺に在る私の宅まで秘密に御報告を願ひます。」と探偵料と名刺とを渡して、探偵社を出たが、更に又帝國廣告社へ自働車を走せた。而うして廣告主任と面會して、

「尋人の廣告が御願ひ申したくて上りましたが、雜報欄の真中へ、六十行ばかりの廣告を市内の各新聞へ残らず、それも是非明朝の新聞へ掲載方が取計つて貰ひたいですが、御引受下さいませうか。」

主任は時計を眺めてをつたが、

「宜しうございます、御引受け致しませう、原稿御持ちでせうか。」

「原稿は持つてをります。」

と佐分は自働車の中で、認めた左の原稿を取出して渡した。

今より十七年以前産婆を業としてゐた、岩田竹子女史の現今の所在を今正午までに下名へ御通知下さる御方へは、十圓の報酬を呈す

京橋八官町

帝國廣告社廣告部

廣告主任は一見した後、其原稿を事務員へ渡した。すると事務員は、直にそれを各新聞社へ送るだけ騰寫版に附して原稿を作るのであつた。かくて廣告主任は廣告料を計算して計算書を渡した。佐分はそれを見した後、廣告料を支拂つて、領收書を受取つた上、早々公爵家へ歸つた。

而うして父誠之進へ、探信社へ托した事、各新聞へ廣告を依頼した事など、詳しく物語つた後、我家へと引取つた。誠之進は公爵へ事の顛末を告げた。が、公爵は佐分父子の忠勤を非常に歎ぶと共に、明日の報告を千秋の思で待つのであつた。

犯人搜索

麴町區一番町の阿部恒忠の宅を訪れて、主人へ面會を求めたのは、芝警察の探偵井上義正であつた。阿部は取次が出した名刺を眺めて、眉を顰めた。

「刑事探偵なぞに訪問される覺はないが、何用で來たのか知ら……」

「咄きつゝも、」

「應接室へ通すが宜い。」

と取次へ命じた。取次は井上探偵を應接室へ案内した。間もあらず阿部は入つて來た。

お

「私が阿部ですが、何か御用でせうか。」
と問ひかけた。

「少々御問ね致たいことがあつて参りました、外のことはありませんが、今より
四年以前、雪舟の描いた羅浮仙の掛物を、伯爵の勘解野様へ御賣却に成つたさうで
すが、御記憶ございますか。」
と問ねた。

「如何にも賣却した覺があります、あの書が何うか致しましたか。」

「あの書は貴方が所有してゐらしたのでせうか、それとも他から御買求めなすつ
たのでせうか、それが承はりたいのです。」

「あの書は、私の知つてをる軍人から賣却方を托されて、勘解野伯へ周旋したまで
のことで、私の所有品ではないのです。」

「其軍人といふのは、何といふ人で何れにをる方でせうか、詳しく御話を願ひます。」

「當時は何れにゐるか、杳として消息を知らないですが、其頃は四谷永住町に住居
して、第一師團に奉職してゐた、國弘鹿造といふ、歩兵大尉です。」

井上探偵は、手帳を取出して、聞くが儘を記すのであつた。

「勘解野伯へ、何程で御賣却なすつたでせうか。」

「確か参千圓と記憶してをります。」

「國弘大尉は何れから手に入れたか、然ういふ話はお聞にならなかつたでせうか。」

「そんなことは聞かなかつたですが、一體あの書が何うかしたのですか。」

「實はあの書は贓品で、あの當時盜難届が出てゐたのですが、今日まで如何に探偵
しても、所在が知れなかつたのですけれど、昨日に成つて、現在の所有者が明瞭し
たのですが、其話に依ると、貴方から勘解野伯へ賣却されたものと分つたものです
から、それで御問ねに上つたのです。」

「へえ、あの軸物が贓品でしたか、して何人の所有品であつたでせう。」

「盗まれた人は、高木優といふ、其頃十三歳の少年であつたのです。」

「左様ですか、あゝいふ名書を所持してゐるほどの方なら、定めて名家でございませうね。」

「私も詳しいことは存じませんが、名家どころではなく、極めて貧困な人のやうに承つてをります。」

「それであの書は、既に勘解野家から、警察の方へ御引上げに成つたでせうか。」

「其軸物は、もう勘解野家の手から他へ賣却されてをりますが、まだ警察へ押収はしてをりません。」

「勘解野様から他へ御賣却に成りましたかね。」

「どうも御邪魔致しました、ではこれから國弘大尉に會つて、出所を質して見ませう。」

と井上刑事は別を告げて阿部の宅を出た。而うして、第一師團の司令部へと急いだ。

司令部へ着くと、司令副官に面會して、國弘大尉の所在を問ねた。副官は名簿を繰擴げて調べてをつたが、

「當師團には國弘といふ大尉は、現在ではゐないですよ、何時頃のことです。」

「今より四年以前のことです。」

「それでは何方へか轉任したのでせう。」

「御手数ながら御調べは願はれないでせうかね。」

副官は四年以前の名簿を取出して調べるのであつた。

「解りました、其國弘大尉は、韓國へ轉任を命ぜられて彼地へ赴きましたから、多分まだ守備軍に在勤してをるでせう、何か國弘に嫌疑でもあるんですか。」

と副官が問ねた。

「別に嫌疑ではないのですが、少々お問ねしたい事がございまして、それで御手数を煩はしたのです。」

「職員録を調べて見なさい、陸軍省の韓國守備軍の中にをると思ひます。」

「有難うございます、どうも御手数数をかけました。」

と井上探偵は禮を述べて司令部を出た。而うして一先づ本署へ歸つて探偵の結果を署長へ報告して指揮を待つのであつた。署長は熟考した後、

「それでは、憲兵隊へ依頼して、取調べて貰ふ事に致やうか、それとも誰か出張させやうか。」

「憲兵隊へ依頼すると、急の間には合はないと考へますから、出張して取調べては如何でせう。」

「然うだね、それでは君に出張して取調べて貰はうかね。」

「職員録を調べて見まして、愈よ韓國に在勤すると分りましたら、出張して取調べて見ませう、國弘大尉を調べましたら、眞の犯罪者が畧分ると思料致します。」

「それでは先づ新宿の濱野茂馬の宅へ往つて、雪舟の掛物を實驗して此方から何分

の沙汰をするまで、大切に保存するやうに、請書を出さして歸るが宜い。」

「承知致しました、早速出張して、現物を一見して請書を徴して歸りませう。」

と直に新宿へ往つて、濱野家を訪れた。

「御主人が御在宅なれば、是非御面會致たい用件があつて上りましたから、御取次を願ひます。」

と取次の執事へいつた。

「寸時お控下さい。」

と執事は名刺を手にして奥へ入つたが、程なく顯れて、

「どうぞ此方へ……………」

と應接室へ案内した。井上は室内の裝飾など眺めて待つてをると、立派な紳士が入つて來た。

「私が濱野です、何か御用談があるといふ事でしたが、何ういふ御用でせう。」

と問ひかけた。

「他の事ではありませんが、勘解野伯から雪舟の筆に成つた羅浮仙の掛物をお求めになつたさうですが、其の掛物はまだ御手元にございませうか。」と問ねた。

「所持してをりますが、彼品が何うかしたのでせうか。」

「彼品は高木優といふ人が賊のために盗まれた、贓品なのです。」

「え、つ、あの掛物が窃盗した贓品ですつて？」

「尤も四年以前の被害で、近頃の事ではないのです、就いて一應拜見した上で、この事件が落着するまで、大切に保有してゐて頂かなければなりませんから、その請書を認めて貰ひたいです。」

「それはとんだ厄介品を買ひましたね、如何でせう、押收されるやうな事はないでせうか。」

「被害者から代價を賠償して返還を請求される時は、元來が不正品なのですから、御返しにならなければなりません、時日を経過してをりますし、既に幾人かの手を経て御求めに成つたのですから、押收されるやうな事はないです。」

「盗んだ者が擧げられたのですか。」

「いゝえ、まだ擧げられは致ませんが、早晚檢舉致します。」

と、實物を改めた後、受書を徴して歸り去つた。

産 婆

今し佐分誠也を其宅に訪れたのは、産婆岩田竹子の所在探査を委託された、大日本探信社の主任三枝光吉であつた。誠也は結果如何と氣遣ひながら、早速書齋へ引見した。

「お欣び下さい、昨日から殆んど徹宵大々の活動を試みて、漸く先刻所在を確かま

したが、幸ひにまだ無事で産婆を勤めてゐるのです。」
と得意然と告げた。誠也も満面に歡喜の色を湛へて、

「それは御苦勞をかけたました、して當時何れにをりませうか。」

「赤坂仲の町十五番地にをります。」

「然うですか、能く無事でゐたものですね、もう餘程の老婦人でせうね。」

「ところが大變な相違です、まだ四十五だといひますが、打見たところ四十位より見えない、なか／＼元氣な女です。」

「然うですか、して見ると若い時から開業したものと見えますね。」

「十七年以前に既に堂々と開業してゐたほどですから、若い時から開業したものに相違ありません。」

「しかし早く所在が知れて、何より好都合でした。それでは御約束に基いて、百圓だけ御慰勞として差上げますから、宜しいやうに御取計を願ひます。」

と銀行切手で百圓渡した。三枝は厚く禮を述べて歸つて往つた。誠也に直に公爵家へ電話をかけて、産婆の所在が探偵の結果判明した旨を知らせて、公爵家へ同道すべきか、それとも、自分が産婆に面會して、事實を確かめやうかと、父誠之進へ相談した。すると誠之進から、同道せよといふ、公爵の希望であるから、直様同伴して參邸せよといふ電話であつた。ために仲を赤坂仲の町へ飛ばして、岩田の宅を訪ふた。門構の立派な家で、大學卒業産婆岩田竹子といふ、大看板が掲げられて在るのが衆目を引く、案内を乞ふと、若い看護婦スタイルの女が出て來た。誠也は名刺を渡して、

「岩田竹子さんに、是非御面會致したい事があつて伺ひますから、御取次を願ひます。」

と申込んだ。

「寸時どうぞ……」

と取次は名刺を受取ながら、佐分の瀟洒の風采を、瞥々と眺めて奥へ入つた。が直に出て来て、

「どうぞ此方へ。」

と客室へ案内した。所へ肉附の良い四十前後の婦人が入つて来た。叮嚀に一禮して、
「私が竹子でございます、何か御用で御越し下さいますか。」
と來意を問ねた。誠也は笑を見せつゝ、

「突然妙な事を御問ねなり、御願ひなりに上りましたが、貴女は今より十幾年以前新橋の小花家といふ藝妓家に、花吉といふ藝妓のゐたのを御存じありませんか。」
と問ひ試みた。

「えゝゝ存じてをりますとも、あの頃新橋で三美人の随一といはれた、それはそれは書に描いたやうな美しい藝妓さんでしたわ。」

「何ういふ御關係から御存じでせうか、藝妓にならない以前からの御知合ひでせうか、それとも勤に出てからの御知合ひでせうか。」

「知合に成りましたのは、勤に出てからですとも、あの方が某最負な方のお胤を宿

しまして、其産婆を頼まれたのが縁故で、親しくしてゐたのでございます。」

「實は其小兒の事でお問ねに上つたのですが、聞けば産れた小兒を、貴女の御周旋で養子に遣つて了つたさうですが、何方へ御周旋下さつたか、それが聞かして頂きたいです。」

「それは神田神保町に住んでゐた、高木長兵衛といふ方が、男の兒が一人限あつたのを行衛を分らなくした爲に、是非男の兒があつたら、周旋して欲しいといはれましたので、御周旋申しましたんですよ。」

「して其小兒の名は御記憶ございませんか。」

竹子は考へてをつたが、

「名前は確と記憶してをりませんが、其お兒さんは、某御身分の高いお方の落胤で

あつた爲に、金襴の袋に入つた短刀と、箱に入つた掛物と、外に金子が百圓附いてゐたことだけは記憶してゐます。」

と答へた。佐分は愈々優が公爵の落胤に相違無いことを、心に肯首きつゝ、

「其後其長兵衛といふ人にお會ひでしたか。」

「不幸な人同志の寄合で、花吉さんも亡くなつて了ひます、其長兵衛といふ人も、神田の大火に丸焼と成つた上に、自分も焼死んで了つて、女房さんと小兒は、何處へ往きましたか、一度訪ねましたけれど、行衛が知れなく成りましたから、それ限りお尋ね申しませんですよ。」

「其小兒の實父といふのは、何といふ方であつたか御存じございませんか。」

「薄々聞かないではなかつたのですが、親知らずといふ約束で御周旋申しましたから、一切秘密にして今日まで誰方にも御話したことないんでございます。」

「いや、もうこれだけ聞けば事は明瞭致ました、就いては今一つ御願ひがあるので

すが、御禮は必ず致しますから、御承諾は願はれないでせうか。」

「私で間に合ひますことなら、御役に立ちますが、何ういふことなんでせう。」

「實は、恚ういふ次第です。」

と公爵家の事情を打明けて話した後、

「どうか貴女から公爵へ其當時の御話かして頂きたいです。」

「宜しうございます、公爵家の御一大事であつて見れば、御目通りして、當時の物

語を詳しく申し上げませう。」

「早速御承知下さつて、こんな満足はございません、それでは唯今屋敷から迎の自動車呼びますから、失禮ながら電話を拜借さして下さい。」

と電話室へ入つて、自動車を廻すべく、公爵家へ電話をかけた。

「それでは私は一寸失禮して、衣服を改めますから、暫時御免下さいまし。」
と竹子は室を去つた。

「かう成つて見ると、愈々優が公爵の落胤で、公爵家の相續をすることに成るのだが、人の運命ほど計られないものはないね、しかし御落胤と知らずに、随分種々な世話をしたが、これも主従盡せぬ縁であつたのかも知れない。」

と恚慮ことを考へつゝ待受けてをる中に、早くも迎への自働車が来る。竹子の支度も整ふたので、乗つて来た俵を返して、竹子と共に自働車に乗つて、御室邸へと急いだ。時はもう十一時過で、午に成らうといふ時刻であつた。

公爵家へ着いて見ると、邸内に馬車や自働車が數臺待受けてをるから、若や容態が悪いのではないかと、早速支關にゐる家従に問ねて見ると、

「御容態にお變りはないやうに思ひますが、御親戚様へ電話をかけて御來邸を促した結果、唯今皆様御來邸遊ばししてございます。」

と答へた。誠也は安心しつゝ竹子を伴ふて父の控室へ通つた。すると誠之進が、
「御苦勞ちやつたね、御前様へ岩田様のことを申し上げたら、親戚立會の上で聴き

たいと仰やつて、唯今皆様御來邸に成つて御待受の所だから、早速御伺ひ申して來ませう。」

と公爵の病室へ往つた。が、やがて入つて來て、

「岩田さん、それでは御案内申しますから、どうか御前様の御病室で御話下さるやうに願ひます。」

「左様でございますか、知つてをるだけのお話は申し上げるでございませう。」

佐分父子と共に、公爵の病室へ入つて竹子は、黒羽二重の紋附に、七珍の帯を締めて、恭しく末座に着いた、床の間に、嵯峨公爵、嵐野侯爵、五條侯爵、島原伯爵の親戚が、すらりと列席してをつた。御室公爵はと見れば、附添の老女吳竹に援けられて、瀕死の病軀を、脇息に靠れてゐた。

「過日來、御息様の御所在を、有ゆる手段をもつて捜しました結果、漸やくにして捜し得ましてございますが、しかし後日に至りまして、左右の間違が生じまして

は、公爵家の一大事と存じまして、其當時御前様から御遣し置に成りました、紀念品を取調べて、親く御覽に供へ、今日は又其當時御出産の御世話をされたのみならず、他家へ養子に御世話をされた、岩田竹子様に御足勞を願ひまして、御子息様に相違無いといふ、確證が得たいと存じまして、御迎へ申した次第でございます。どうか御室家萬年の礎をお定めに成る、いとも大切な事件と存じますから、只今竹子様の話されます、當時の事實を御聴取下さいまして、御疑ひの點がございました節は御問ねを願ひたう存じます。」

と先づ家令の誠之進が述べた。すると誠也が、落胤搜索の顛末を物語つた後、

「それでは竹子様、どうか當時の御話を願ひます。」と竹子を促した。竹子は一同へ黙禮した後、

「指折り計へますと、十七年以前でございます、私は大學病院で産婆學を修めました、卒業後、京橋區南銅町に開業してをりますと、其頃新橋の三美人と噂のあつ

た、小花家の花吉さんといふ方が、妊娠されました、私に産婆を托されたのでございます、毎月伺つて手當をしてをります中に、月が満ちてお産れなすつたのは、能く珠のやうだと申しますが眞箇珠のやうな男のお兒様でございます。けれども御稼業柄、お兒様があつてはお勤が出来ないから、愛して育て、下さる方があるなら寧ろ遣つて了ひたいから、欲しいといふ方があつたら、周旋して呉れといふ御頼があつたものですから、内々心懸けてをりますと、これも私が産婆を勤めました、神田神保町の高木長兵衛といふ方の女房さんから一人限の小兒さんが、表へ遊に出たきり、行衛が分らなくなつて、二ヶ月餘り夢中に成つて、警察は勿論、有と有ゆる手を盡して捜したけれども、何う捜しても知れないから、可愛い男の兒があつたら、代に貰ひたいと思ふから、周旋を頼むと申されました、丁度幸ひと存じましたから斯様々々のお兒様があるが如何でせうと申しましたら、是非周旋を頼むと申されたものですから、花吉さんに話して遂に御周旋申しましたのです。」

と周旋した顛末を述べた。すると誠之進は謹嚴な態度で、

「して其小兒様に、何か紀念の品は附いてゐなかつたでせうか。」と問ひかけた。

「金襴の袋に入つた短刀と、箱に入つた掛物が一幅と、お金子が百圓衣類の外に附いてをりましたでございませう。」と答へた。誠之進は重ねて、

「して其小兒様の名は、何と附けられてゐたか、御承知ありませんか。」

「はい、何を申しましても、十七年以前のことです。御名は記憶してゐないのでございませう。」

誠之進は公爵に向つて、

「如何でございませう、まだ御問ねに成ることがございませうか。」と問ねた。公爵は満足さうに、

「もう宜い、これで十分に分つた。」

「竹子さん御苦勞でした、どうか別室で御休息を願ひます。」と誠之進がいつた。

「はい有難う存じます。」

相續問題

御室公爵は來會の親戚方に向つて、

「唯今御聽の通り、件は高木長兵衛なる者の養子に成つたことが證據立てられまして、引取つて公爵家を相續させる決心でありますから、何分にも宜敷御盡力をお願い申します。」

と告げた。すると嵯峨公爵が、

「貴方の血統を稟けた相續者を得られたのは、御室家の爲に、此上もない慶賀すべ

きことですが、しかし民間に成長して、何ういふ性格の人間に成つてゐられるか、それを一應御取調に成らなければ、萬一大切な家門に汚點を印するやうなことがあれば、一家の不幸を招くのみならず、恐れ多くも御上様へ對して申譯の辭がありませんから、其選篤と御熟考の上、御取極に成ることをお勧め致します。」

「私も其邊を心配して、何より先に今日の境遇なり、人と成を調べて見させたところ、學校の成績も不良は無いやうですし、繪も相當に描けるさうですから、本人に會つて見て、御室家を相續させる資格があれば、相續させますし、萬一見込が無いと考へた節は、如何に私の正系とは申せ、家の名譽には換へ難いから、斷乎として排斥致しますから、御安心を願ひます。」

「それでは、御會見の日が定つたら、我々も其時立會致やうではありませんか。」

と嵯峨公が他の親戚を顧みた。御室公はいとも満足さうに、

「御室家を思ふて下さればこそ、かくまで御心配下さる段、深く感謝致します、甚だ恐縮ながら、とても御足勞序に、御立會下さつて、當人の人と成を親しく御覽下されば、誠に好都合と存じます。」

と告げた。

「左様なれば、御會見の時日が決定次第御知らせを願つて、立會することに致します。」

と嵯峨公が一同を代表して答た。

「何分にも宜しく願ひます。」

「御重患のお體に御障があつてはならないから、我々はこれで失禮致します、精々御加養なさるやうに御勧め致します。」

「有難うございます、どうか別室に於て、悠々御休息下さるやうに願ひます。」

すると誠之進が、

「どうか別室で御休息下さいませやう、御願ひ申します。」

と挨拶した。爲に親戚一同は別室へ案内されて、茶菓の饗應を受けて歸つて往つた。御室公爵は、直に主治醫が診察したが、餘程神経が興奮して、病勢不良と見たので、安静を勧めると共に、藥劑を投じた。

誠之進は誠也と相談を始めた。

「御前様の御病氣が募つて来ると、御會見も出来なくなるから、今日にも御會見の手續を運んで、明日御會見が済みたいと思ふが、どんなものぢやらうな。」と誠之進が意見を問ねた。

「御親戚方とも御相談が纏つたのですから、今日にも運んだ方が宜いと思ひますから、私はこれから寺山の宅へ往つて、高木に會つて打合せをして歸りませう。」と誠也が答へた。

「それでは明朝十時を期して會見するやうに、打合をして来て呉れないか。」

「承知致しました、それでは寺山と相談して、打合を致て来ますが、愈よ明日十時に會見することに決定致しましたら、早速電話をかけますから、御親戚方へ御通知して置いて下さい。」

「御苦勞ぢやが、どうか頼むよ。」

「承知致しました。」

誠也は、公爵家の自動車に乗つて寺山家を訪ふべく出て往つた。時は午後三時過ぎのことであつた。

今しも寺山天聲と密談を凝しつゝあるは、佐分誠也である。

「御多忙中を度々御邪魔して恐縮致します、實は高木優の事に就いて御相談に上つたのですが、種々探査の結果、高木が公爵の落胤に相違無いと判明致しましたので、明日公爵を始め、御親戚の方々御列席の上、會見がさせたいと思ひまして其御相談に

上つたのです。」
と佐分が來意を告げた。

「はア、愈よ相違無いと判明致ましたか、すると高木が公爵家の相續人に成るのでせうかね。」

「明日の會見に於て、それが決定する筈ですが、今日の情勢から推しますと、無論決定する事と考へます。」

「へえ、人の運命といふものは實に計り知れないものですな、當人はまだ何んにも知らずに、文展の出品畫に、夢中に成つてゐますが、この事を知らしたら、吃驚仰天するでせう。」

「もう學校から歸つたでせうか。」

「今日は土曜ですから、無論歸つてをると思ひます。」

「一應話して聞かせたいと思ひますから、一寸此處へお呼びは願へないでせうか。」

「宜しうございます、唯今呼ます。」

と呼鈴を鳴らして、高木を呼ばしめた、高木は召に應じて入つて來たが佐分の姿を見るや否や、忽ち顔を染めた。

「御召でございましたか。」

と先づ寺山へ挨拶した。

「少し話したい事があつて呼んだのだ、襖を閉めてまあ進むが宜い。」

すると高木は佐分に向つて、

「入來しやいませ、其後は誠に御無沙汰なり、且つ申譯のない不義理を致しまして何とも汗顔に堪へません、しかしこれには種々事情がございますので、何れ詳しく述べて御説は致しますが、どうか平に御許を願ひます。」

と謝罪した。佐分は微笑しつゝ、

「君が無斷で家出をするほどだから能々の事情が在つたに相違無いと思つたから、

それは何とも思はなかつたが、唯困つてはゐないかとその事のみ心配してをつたのだ、ところが、豈計らんや、寺山先生の御厄介に成つて、依然として勉學を續けてをると聞いて、漸く安心したのだ、まあ、墮落もせず熱心に勉強してをるのは、何より結構だ。

「伊藤様では、定めて恩知らずの人非人だと、御立腹なすつてゐらつしやるでございませうね。」

「何有少しも立腹なぞしてはゐられないが、前途を誤まらなければ宜いがと、それを心配してゐられた。」

すると寺山が微笑しつゝ、

「呼んだのは、私がか用向があるのではなく、佐分様が御用がお在りなさるさうだから、それで呼んだのだ。」

「左様でございましたか。」

「高木君、今日は君に意外な福音を傳へに來たのだ。餘りに意外過て疑念を起されるかも知れないが、私のいふ事を能く聞て呉れ給へ。」

と、御室公爵の落胤である事、御室公爵家に相續者の無い事、公爵が重患に陥つてゐる事など物語つて、

「御存生中に相續者を決定して置たいといふ、公爵の御希望から、御落胤の所在を搜索した結果、君が公爵の落胤と判明したので、明日の午前十時、公爵邸に於いて公爵始め親戚方と會見して、相續者と定めるか否やに就いて、御相談が在る筈に成つてをるから、君に來て貰はなくちやならないので、それが爲に相談に來のだ。」

と來意を告げた。

空谷の聲音といはうか、寢耳に水といはうか、佐分の語り出した意外の物語を聞いた高木は、我と我耳を疑ふまで打愕いた。

「佐分様、そゝそれは眞箇のこととせうか、人違ぢやないですか。」

と疑ふやうに問ねた。

「私も最初は豈夫と疑つても見たがしかし證據と事實が證明して、一點疑念を挟む餘地がないのだから致方がない。」

と、彼の雪舟の掛物のことから、産婆の岩田竹子の證明等を詳細に語り聞せた。

「へえ、妙なことがあるものですね、すると僕は御室公の庶子に産れた理なんですわね。」

「まあ、然うです。」

「ですけれども、御室家といへば、貴族中一二の名門で、畏れ多くも五攝家の隨一に指を折られる權家です、設令僕が公爵の血を稟けてをるとしても、幼少より民間の貧家に育てられて、御承知の境遇を経て今日に至つたのですから、到底名家を繼ぐべき資格がないのみならず家門の汚れと成る理ですから、折角のお辭ではあります。すが僕は依然高木優で、一生を終つた方が、寧ろ苦痛が少いと考へますから、どう

か悪しからずお許を願ひます。」と拒絶した。

「成程君の辭は一理ある辭で、君の今日までの境遇閱歴からいへば、無理ならぬことであるが、しかし、若し君が拒絶して了へば、御室家の血統は、純なる正系が絶えて、幾分か他の血の混じた人をもつて、相續させなければならぬことになるが、然うなると綿々と繼續して來た、名家の血統が絶えることに成るが、それは正しい血を稟けた人としては、忍ぶことの出来ない不幸であるから、左にも右にも明朝公爵家に於いて、親戚方立會の上で、君と公爵と會見される順序に成つて居るから、會見して見給へ、其上で、君が進んで相續したいといつても、公爵を初め親戚の方々が承諾されないかも知れず君が如何に辭退しても、許されないかも知れず公爵家の主人公と成るも、成らないも、明日の會見に於て決定するのだから、萬事は私に一任して、明日は快く御室家へ來て呉れ給へ。」

と勧めた。すると寺山も

「君が御室公爵の落胤であらうなどは、夢にも知らず世話をしをつたが、知らない中は左も右も、斯うして判明した上は、設令君に相續をさせないまでも、相當の保護は與へられるに極つてをるから君の前途は實に幸福と光明とに充されてをるといつて宜いのだだから、幸ひ君の爲には、關係の深い佐分様が、萬事一任して會見せよと仰やるんだから、お任せして承諾するが宜いぢやないか。」と勧めた。

「餘り意外なお話ですから、何と御挨拶して宜いか、挨拶に迷ふほどですが、佐分様なり先生なりのお勧めですから、左に右會見だけは致します、どうか宜しいやうにお取計らひを願ひます。」と承諾の旨を答へた。

「すると誠に恐縮ですが、迎の馬車を差向けますから、先生が御同伴下さること

は出来ないでせうか公爵家からは、家扶なり家従なりが、お迎へとして來ること、考へますけれど、今日では貴方の保護の下に在る人ですから、是非願ひ申したいと思ひますが、如何でせうか。」

と佐分がいつた。

「私が同伴する方が宜しければ、同伴致します。」

「どうか御足勞ながら宜しく願ひ致します。」

「高木の服装は何う致ませう、禮服でなくちやならないでせうか。」

「左様、學生ですから、學生服の儘が却つて宜いでせう。」

優の話

佐分は寺山と會見上の打合せを済した後、公爵家へ電話をもつて、其結果を通知して置いて、歸途伊藤伯爵家を訪れた、その時は既に黄昏近い頃であつたから、幸ひ

伯爵も在邸であつたので、直様書齋へ通つて面會した。

「御室公爵が重患に罹られましたので、餘義ない事から欠勤致しまして、甚だ相濟みませんけれど、明日で私の責任は一先づ片附く意ですから、明後日より出勤する考へてございます。」

と佐分が挨拶した。

「官衙の方はそれほど多忙でないから、差支へないが、公爵の御容態はどんな容子かね、私も一度御見舞に往つたきり、得伺はないでをるが、まだ危篤といふ程ではないと見えるね。」

「一時危篤であつたのですか相續問題が解決致ないものですから、精神的に病氣と對抗してゐられるのです、主治醫の診断では、もう數日の命脈だと申してをります。」

「それでも腦溢血だといふのに、今日まで能く保たれたものだね、私も明朝御見舞

に上らうよ、由縁の爲には媒酌の恩人だからね。」

「定めてお歡びに成るでございませう。」

「して相續問題は何うなつたね、もう決定致たのかね。」

「畧決定したのですが、明日に成らなければ、確定とまでは定まらないのです、何に致しましても、奥様に御子様がお在りなさらぬものですから、某藝妓との中に挙げられた、落胤の所在を捜してゐたのですが、それが漸く一兩日以前に知れたのですから、それを相續者に致やうといふ御相談なのですからね。」

「なる程ね、名門だけに相續問題には困るだらうね、しかし其落胤といふのは、何ういふ境遇に在る人か知らないが、左に右幸福な人だね。」

「實は其御話を致さうと思つて上つたのですが、其御落胤といふのが彼の高木優なのですから愕くちやございませんか。」

「何だつて!? 高木優が御室公爵の落胤だつて! あの宅にゐた優が!」

伯爵は眼を圓くして愕いた。

「實に意外な事があればあるものです、あの高木が豈夫公爵の落胤であらうなぞとは、夢にも思つてゐなかつたのですが、漸次探つた結果、愈よ相違無いと判明したのです。」

「それは眞箇意外千萬だ、それで高木の居所が分つたかね。」

「分りました、此方から出ると共に寺山書伯の家へ厄介に成つて、相變らず學校へも通つてゐたのです。」

「あの當時寺山へ問ねたけれども、知らないといふ挨拶ぢやなかつたかね。」

「それは高木が頼んで、秘密にして貰つたのださうです。」

「君は高木に面會したかね。」

「はい、今日初めて面會致しましたが、太く恐縮して、託言を述べてゐました。しかしお屋敷を出たに就いての事情を、畧確めました、寧ろ同情すべき點があるやうに

考へました、決してお屋敷を出るのが彼の本意ではなかつたので、眞箇止むを得ない事情の爲に出た事を確めました。」

「それは何ういふ事情だ。あの當時無斷退去しなければならぬやうな、事情は何にもなかつたやうに思ふがね。」

「ところが、彼の境遇としては、退去しなければならぬことがあつたのです。」

と、内々退去の事情を物語つた。それを聞いた伯爵は、益々愕いて、

「成程然ういふ事情があつて、退去したのか……いや實に感すべき奴だ、滔々として墮落の淵に沈む青年の多い今日、斷乎として品性を保つと共に、恩義を尊重した點は確に推賞すべきものだ、それで公爵家の相續者に確定致さうかな。」

「落胤に相違ないといふことだけは、確に判明したのですが、何に致しましても、貴族中一二の名家なり殊には宮中との御關係などもあるものですから、輕卒に定める理に参りかねる事情がございますので明朝十時を期して、御親族方御列席の上、

高木と公爵とが面會されて、其上で確定する筈に成つてをりますけれど、私の想像を申しますと、先づ十中の八九まで高木が相續者に定まることゝ考へてをります。」「意外なことがあるものだね、然ら聞けば、どうも下等社會で育てられながら、何處かに美しい點があつて、確に紳士の正しい血を稟けたのが微見えてゐたよ。」「今日になつて、彼の容貌を見ますと、公爵の面相に能く似た點がございます。」「しかし、高木が御室家の相續者と成れば、君とは主従の關係と成る理だが、これまでと反對の地位と成るぢやないか。」「

微笑みつゝいつた。

「それは止を得ないです、生れながらにして、名門の正しい血を稟けて出たのですからね……しかし偶然私が世話をして、どうにか今日に至つたのは、所謂主従盡せぬ縁かも知れないです。」「

「二層主従の關係が深く成つて、双方が好都合かも知れないが、左に右知らずに世

話をしてゐたのが、十數代仕へて來た、主人の落胤であつたといふ事は、傳説か小説にでも在りさうな奇なる因縁といはなければならぬね。」「

「これらが所謂盡せぬ縁とでも申すのでございませう、眞箇不思議な事蹟です。」「

「しかし高木なら、今後の教育に依つて、公爵家を相續させても、家名を汚すやうな事はあるまいと思ふから要は教育如何にあるのだ。」「

「随分細民の中に混つて、幼少の頃から苦勞して來たのですが、それにしても悪風習にも染まず、頭腦も比較的良い方ですから、公爵家へ引取られて、十分の教育をされたら、立派に相續が出来るかも知れないです。」「

「學校は今でも第一中學へ通つてをるか知ら……」

「はい、依然通つてゐるさうですが、成績は非常に良いさうです。」「

「昔時亂世の頃は、足輕や、士分の者から、一足飛に大名に成つた例はあるが、文明の今日、新聞賣や給仕をしてゐた者が、一躍大公爵家の主人公に成るなんて、確

に天下の奇蹟だね。」

「先刻會つて、公爵家の相續者に成るのだつて話しますと、自分は設令公爵の落胤にもせよ、民間のしかも下等社會で成長して、禮儀作法は固より、教育とても、漸く皆様の保護によつて、遅れながら中學に通つてをる状態ですから、到底公爵家を相續する資格はないのですから、平に辭退するといつてゐましたが、當人も餘りの意外に驚いてをりました。」

「しかし御室公は、親子の關係上、相續者にしたい心があるであらうけれど、他の華族と異つて、宮中との關係が深いから、宮中の意嚮も確めなければならず、御親族方の意見ものだから、或は否定されるかも知れないね。」

「それは御有理千萬ですが、宮中の故障さへ出ない限りは、親族方に異論はあるまいと存じますから、十中の八九まで決定するであらうと考へますけれど萬一です、否定されるとしても、高木は公爵家へ引取られて、十分教育されるのみならず、分

家して男爵華族には成れますから、いづれにしても、幸福な身の上です。」

「すると、日外盗まれたといつてゐた、あの掛物が公爵から與へられた、紀念の品であつたのだね。」

「然うです然うです、あの掛物です。」

「盗まれた掛物が出て來たのかね。」

と伯爵が問ねた。

「はい、出て参りましたが、それも實に意外なことから出て参りましたので、唯々不思議といふの外はないです。」

と寺山家へ、掛物のことに就いて、問合せに往つて、語合ひつゝ在つた折柄へ、新宿の濱野茂馬といふ紳士が、勘解野伯爵から買求めたとて、一幅の掛物を持つて來て、鑑定を請ふたこと、其掛物が曾て高木が所持してをつた、雪舟の畫であつたことを物語つた後、

「盗まれた掛物が、何うして勘解野家に在つたか、それが不審に堪へないものですから、寺山家を出ると、芝警察へ往つて、探偵方を依頼致しましたところが、探偵の結果が、實に意外な人の手から出てをることが確かめられたのです。」

「意外な人といふのは、知合の人かね。」

「意外の人といふのは、他の人ではありませんが、彼の國弘君の手から博物館の美術部の主任をしてをる、阿部といふ人が三千圓で買受けて、勘解野伯へ譲つたのださうですが、國弘君は何者から手に入れられたか、遠方にゐられるために、詳細のことが分らないものですから、目下朝鮮まで刑事調査を特派して、探偵に従事してあるさうですが、高木の所有品を盗み取つて、國弘君の手に賣渡すといふのが、既に奇なる因縁であるのに、其又掛物が、廻り廻つて、高木が厄介に成つてをる、寺山の家へ鑑定に持つて來るといふは、能々奇なる因縁だと思ふのでございます。」

語り告げた。

「それは意外だねすると、國弘の手から、阿部の手に渡つて、阿部から勘解野へ賣渡したのが、更に濱野といふ人の手に渡つたといふのだね。」

「はい、左様でございます。」

「國弘の手から出た？ そんな不正な物品を、何者から買取つたか知ら……女のやうな卑劣な奴ではあるけれども、豈夫他人の所有品を、手を附けて取るやうなことはないから、何者からか買受けたに相違あるまいと思ふけれども、いづれにしても、軍人でありながら、自分が鑑賞するならまだしも、賣買するなどは怪しからぬ奴だ。」

とはいつたが、若や不正なことをしたのではあるまいかと、不安に思はないではなかつた。

「無論何者からか、買取つて阿部に賣却されたものに相違あるまいと存じますが、左に右日ならず明瞭すると思ひます。」

「それから、唯今聞いた、露香と高木との一件は、どうか秘密にして置いて貰ひたい露香へ對しては、いづれ機會を見て、靜に訓戒を加へさす心算だからね。」

「それは無論のことです、知つてをる者は、私ばかりですから、決して御心配には及びません。」

ところへ小間使が来て、恭しう、

「晚餐のお支度が調ひましてございますから、何時でもお召上り下さいませ。」と知らせた。

「然うかそれでは、直に食べやう……さあ一緒に往かうぢやないか。」と佐分を顧みた。

「私は直に歸る心算で、公爵家の自動車が待してあるのですがね。」

「晚餐を済して、直ぐ歸れば宜いぢやないか。」

「それでは頂戴して歸りませう。」

と俱に食堂へ往つた。而うして四方八方の談話を交へながら、浴食した後、

「それでは失禮致します、明後日から出勤致しますから、今日一日御暇を願ひます。」と伯爵へ挨拶した。

「若し公爵家が多忙で、君を要する事があるなら、官衙の方は繰合が附くから休んでも差支へないよ。」

「有難うございます。」

親子の對面

御室公爵邸に在つては、今日は公爵の御落胤たる高木優と、公爵とが初ての對面日であるために、豫て立會を約して在つた親戚方は、馬車を驅つて、續々と來邸して、客室に於て時刻の來るのを待受けるのであつた、その此處に至るまでの斡旋の任に當つた、佐分父子は、早朝から參邸して、總ての準備を指揮してをつた。

公爵の病勢はと見れば、益々衰弱の容子は見えるが、しかし十餘年來寸時も念頭を去らなかつた。唯一人の令息と面會するといふのが、病勢を防止して、十時を告げるを、遅しと待受けてゐた、主治醫や看護婦は親子對面後の、病勢を氣遣ふて寸分の注意も怠らず、豫防手當をして控えてゐた。

將に九時を過ること十分といふ時、二頭立の馬車と、一臺の自動車とは馬丁の案内の聲と共に、玄關先へ着いた。これは迎のため、公爵家から遣はされた、家扶貴島正三郎の馬車と、附添として來た寺山天聲の自動車とで、馬車の正座には、中學の制服を着けた高木優が乗つて、其前には羽織袴の貴島家扶が乗つてゐた。

邸内では多くの召使共が、高木に就いて種々の噂をしつゝ、在つた折柄とて、到着と聞くが否や、一層色めき渡つて、活氣立つた。高木と寺山とは、佐分に導かれて一室に入つて休息するのであつた。召使が、恭しく運ぶ茶菓の饗應を受けなどして對面上の打合せなどしてゐる中に、早くも時計は十時を告げた。

いざ對面といふ知らせに、高木は寺山附添にて、佐分に案内されて、公爵の病室へ入つた。十五疊の病室には、親族方がすらりと列んで、公爵は積重ねた蒲團の上に、脇息に靠れて控えてゐた。高木は公爵の病床近く、相對して着席した。家令の誠之進が一禮した後、

「若君様を御連れ申しましてございます。」

と紹介した。すると高木は無言の儘、恭しく一禮した。公爵は熟と眺めた後、

「お前が優か、故あつて面會するは今日が初めてぢやが、私はお前の父であるぞ。」と名乗つたが、其辭は曇つて、其眼には露を宿してをつた。

「初めて御尊願を拜しますが、承はりますれば、御病氣でゐらつしやいますさうにございますが、御病勢は如何でございます、どうか一日も早く御全快遊ばすやうに只管祈つてをります。」

と、すが／＼して挨拶した。

「意外な病氣に罹つて、十分な治療はしてをるが、到底全快の見込はないので、絶望してをるのぢやよ。」

「病氣に打勝つといふ御決心さへお在りになれば、屹度御全快なさいますから、勇氣をお揮ひに成つて十分御療養なさるやうにお勧め申します。」

「お前のいふ通りぢや、それでは勇氣を出して全快することに致やう。」
と如何にも満足さうにいつた。すると佐分家令は、高木に向つて、

「彼方にお居で遊ばすのは、何れも御親族の方々でゐらつしやいます。」
と告げた。すると高木は列座の親族方に向つて、

「皆様へも初めて御目に懸りますが、私が優でございませう、將來何分にも宜しく御願ひ申します。」

と憶する色もなく挨拶した。一同の親戚は、唯黙禮したのみであつたすると、佐分家令は再び公爵へ、

「此方にゐられるのが、畫家の寺山天聲氏でございませう。」
と告げた。

「寺山畫伯でしたか、病中だから失禮致します、倅が御厄介に預つてゐたさうですね厚く感謝致します。」

と禮を述べた。
寺山は身に餘る面目として歎びながら、

「御禮の御辭に却つて恐縮致します、承はりますると、御不快にゐらせらるゝさうにございませうが、御療養を專一に遊ばされて、御全快の程を偏に願ひます。」
と挨拶した。

「私も全快したいと思つてをるが、腦溢血といふ重患に罹つたのだから、到底全快の望は無いですよ。」

「如何なる重患でも、療養に依つて全快するものでございませうから、御落膽遊ばさ

ないで、十分の御療養をお勧め申します。」

「御親切は有難く感謝致します。」

すると佐分家令は、豫て課し合つて在つたものと見え、

「若様、御面會が相済みました上は、彼方へ御案内致します。」

と高木を促した。高木は公爵を始め親族方へ一禮した後、佐分に伴はれて病室を去つた。

すると公爵は後に残つた寺山に向つて、

「さて寺山君、佐分誠也から委細聞かれて、御承知であらうが、優の性格、品性、頭腦の良否、才智の有無等に就いて、君が實驗されたところを、卒直に聞かして貰ひたいですが、如何でせうな。」

と問ねた。

「御問ねでございますから、實驗の儘を申し上げますが、目下府立第一中學の四年

生にゐられますが、成績は常に首席を占めて、優等を示してゐられます、繪畫をもつて世に立ちたいといはれまして、私が指導してをりますけれど、殆んど天才的でございまして、門生百幾十名中、三四の屈指中に計へる手腕を有してゐられます、性格は至つて真面目で、品性は現今の青年としては稀に見る高潔でございます。」

と答へた。

「實は御室家の相續者に致やうと思ふて、それが爲に御問ねするのぢやが、御承知の通り、お上様と關係の深い、大切な家柄であるから、如何に血脈の續いた倅なりとも、家名を辱しめるやうな者には、繼承させる事が出来ないから喃……何うぢやらう、十分に教育したら公爵家を繼承する事が出来るぢやらうかな。」

「失禮ながら、御問ねでございましてから忌憚なく申し上げますが、有繋は閣下の御嫡流にゐらせられるだけ、今日既に立派な青年紳士でゐらせられますから、今後飽まで學業をお勵みになれば、恐く紳士の典型と成るべき性格を備へてゐられますか

ら、如何なる御名門を繼承されても、間然する點はないやうに存じます。」と答へた。

「能く聞かして下さつた、そのお辭に依つて、参考となるべき好資料を得ました、どうか別室に於て御休息を願ひます。」

「左様なれば、失禮致します。」

公爵始め一同へ挨拶して室を去つた。公爵は列席の親族方に對して、

「御覽の通りの人物で、お聞の通りの性行だといひますが、如何なものでありませう。」

と意見を問ねた。嵯峨公を始め、一同顔を見合してをつたが、やがて、

「寺山の證言の如くでありましたら、公爵家のために慶賀すべき事ですから、速かに御確定に成つた方が宜からうと存じます。」と嵯峨公が挨拶された。

「我々に於ても嵯峨様と同意見でありますから、速かに御取極に成つて、御安心なすつた方が宜いと存じます。」

と他の親族も同意を表したために、公爵は佐分に命じて、再び優を病室へ招かした。優は再び以前の席に着いて、一禮した。

「私は見受ける通り、旦夕をも計られない重患であるから、生前に相續者を定めて置たいと、親族方と相談した結果、お前を當御室家の相續者に定めたから、左様心得るが宜い。」

公爵の辭を聞いた優は、威容端然として、

「お父様のお辭ではございますが、私は斷然相續の義は御辭退申し上げます、どうか他より適當な人を御選びになつて、お定めなされることを希望致します。」

と答へた。二つ返辭で歡び勇んで承諾すると信じてをつた優が、意外にも拒絶したので、一同顔見合はして愕いた。公爵はやゝ急込んで、

「相續を拒むのは、何か理由があるのか。」

「別に理由としてはございませんが、私には公爵家を相續する資格がございませんから、それが爲に御辭退申し上げるのでございます。」

「資格？ 設令資格が無いにしても、私を始め親族一同が認定した上は差支へ無いぢやないか。」

「お辭ではございますが、他の家ならば左も右、當御室家は、畏くも宮中と關係在る、華族中の名門でございまして、一家の柱石たるべき人は、識見高く、徳望厚く一世の師表となるべき傑出の資でなくてはならないと考へます、しかるに醜つて、私の境遇を顧みますと父上の正しい血は稟けてをると致しましたが、生れ落ちると下等社會の細民の手に育てられました、いふに忍びない、辛慘を味ふたのみならず五年以來は、縁故の無い他人の恩恵を受けて、今日に至つたのでございます、かゝる境遇に沈淪した私が、一朝公爵家の主人に成つて、何うして威信と徳望を全ふし

て參られませうか、資格が無いと申しますのは、これがためでございます、宜しく御推察を願ひます。」

と論理明晰に答へた。公爵は無論列ある親族方も、この辭を聞いて感嘆せずにはゐられなかつた。同時に其非凡の才を認めずにはゐられなかつた。

「私は親族の嗟峨久磨だが、成程君のいはれる所は、確に一理ある辭ではあるけれども、古來然ういふ事歴は和漢共に在る例で、彼の淮陰の韓信なども、市井の少年に侮られて、股を潜らせられたこともあれば、貧しい老婆から、食を思まれたこともあるけれども、一度志を得て、漢の高祖に仕へては、其帷幄の將軍と成つて、一世を震撼させた英傑に成た如く、境遇に支配される人間である以上、如何なる境遇に遭會して、他人の世話になることもあらうし、又世話することもあるべき筈であるから、恩恵は恩恵として酬へばそれで済むことで、それが爲に公爵としての威信や徳望に累を及ぼす筈はないやうに考へるから、若し然ういふ深い遠慮があるな

れば、一層識見と徳望を修めて、天晴なる好紳士に成つて、名譽の恢復を計れば宜
いぢやありませんか、殊に公爵の病勢は、油断のならない危険状態に在るさうです
から、病者に安心させるといふことは、君の義務でもあるから、此際は何事をも一
排して承諾されることをお勧めします。」

と忠告した。優は寸時熟考してをつたが、やがて決心したやう、

「私が従来經歷した、暗い惨な境遇を、御承知の上で、飽まで相續せよとお勧め
ございますなれば、謹んでお受け致しますが、しかしまだ青年の身で、殊には上流
の禮義作法すら辨へない私でありますから、皆様が御指導下さつて、公爵家の體面
を汚さないやうに、お心添を願ひます。」

と承諾の旨を答へた。

「能く申した、私が身に萬一のことがあつた場合は、嗟峨様を始め皆様と御相談の
上で、丁年に達するまで御後見を願つて、苟めにも家名を汚さないやう、又お前の

身は、十分に修學して、國家の爲に誠忠を盡すことを忘れてはならない。」

と公爵は満足の色を泛べつゝ諭した。優は謹んで訓戒を守るべき旨を答へた。

相續が確定すると共に、公爵夫人朝子の方も、病室へ顯れて、優との對面をした。
而うして親族立會の上、茲に親子並に親族間の睦の祝儀を擧げた。

「度々御足勞を煩はして恐縮でしたが、私もこれで安心して瞑目が出来ます、さり
ながら、御覽の通りの青年で、何事も不行届ですから、萬事御心添の程を願つて置
ます。」

と御室公爵が親族方へ挨拶した。

「誠に御目出度うございます、我々も大に安心致しました、此上の希望は、貴方の
御病氣の全快です、どうか精々御療養なすつて下さい。」

と嗟峨公が挨拶した、而うして一同は別を告げて歸つて往つた。公爵は再び寺山を
病室へ招いた上、

「寺山君、伴が永々一方ならず御厄介に成つたさうで、厚く御禮を述べます愈よ今日相談の上で、御室家の相續者とする事に決めましたから、今日より當家へ引取つて勉強させたいと思ひますから、どうか御承知の程を願ひます、何れ家臣の者を改めて御禮の御挨拶には出しますが、幸ひの御來邸だから親しく御禮を述べて置きます。」

と挨拶した。

「御念の入つて御挨拶で恐縮致します、私の宅には始終門下生の五六名位は、世話をしてをりますので御令息様を特に御世話を申したといふ理ではないのですから改めて御禮などには必ず御越し下さいませんやうに願ひ致します。が唯閣下へ申上げて置きたいのは、繪畫は優に一家を成すだけの手腕を持つてゐられますから、目下文部省主催の展覽會へ出品される筈で、大作にかゝつてゐられますから、將來は左に右、其作品だけは完成されるやうに致したいと存じますから、御認容のほど

御願ひ致します。」

「美術は國の精華ともいふべき物だから、決して研究を止は致ないが、唯それを職業にすることは、事情上容す理に行かないけれども、好で研究するのは、當人の自由にするから、今後と雖もどうか指導して遣つて下さい。」

「及ばすながら御指導申上げます。」

「御苦勞でした、どうか別室で緩々遊んで下さい。」

「有難う存じます、閣下にも御大切に遊ばしませ。」

「有難う……。」

寺山は病室を退つたが、待受けてをつた佐分誠也は、別室へ伴ふて、公爵家を代表して酒肴の饗應をするのであつた。而うして優や家臣の人々に見送られて、やがて別れて歸つたのである。

かくて優は、高木家を廢家して、御室家へ入家して、宮中其他の手續を済した後

名をも致親と改名して、茲に御室家の相續者とは成つたのである。

しかるに、一時危篤を傳へられた御室公は致親が入家した爲に、やゝ快方に向つて、夫人を始め近親の人々も、愁眉を開くまでは成つた。主治醫もこの變調には少からず愕いたが、しかし快方に向つたのであるから、其原因は不明瞭ながら、心に欣びつゝ、警戒豫防の手當を怠らなかつた。

致親は府立中學を退學して、學習院へ入學してはと勧めるのであつたが、中學を卒業するまでは、依然府立中學に在つて勉強する事に定めて、餘暇さへあれば繪畫を研究して彩管を放さなかつた。

公爵始め令夫人は、十七年間下等社會に生育つたのであるから、下々の陋習に慣れて、總てが野卑で、蟹螯することのみ多いであらうと、それを非常に心配してをつたのであるが、致親の行動を見れば、豫想に反して一舉一動悉く靜肅謹嚴、輕しく一語を發せず、己が書齋と定められた一室に閉籠つて、勉強した餘暇には父

なる公爵の病床を慰問などするのであつた。

「ごうぢや朝子、心配してをつたけれども、意外に行儀作法も正しく靜肅でもあるし、成績が宜いやうぢやないか。」

と公爵が夫人へいつた。

「眞箇豫想違ひでございました、貴方様の御落胤だと申すのに、行儀作法も知らず總ての事が野卑でございましたら、第一召使共の手前面目ございませんから、どんなにか心配してをりましたが、容貌も風采も、貴公子といつて、少しも恥かしくはございませんし、勉強ばかりして、順しくはございます、然うかと申して、辭こそ少うございますけれど、申すべき事は、判然と申します、この分で上流社會の風習に馴れましたら、公爵で候と何方へ出しましても、侮を受けるやうな心配はないと存じます。」

「私もこれで公爵家の後繼は、安心したから、何時歿しても厭はないが、不思議に

病氣が怠つて来たから、願ふべくんば、今一度恢復致たいものぢや。」

「一時は御心配申し上げましたけれども、御辭も餘程判然として参りましたから、どうか及ぶだけの御療養遊ばしまして、御恢復遊ばすやうに祈つてをります。」

「しかし、主治醫を始め、來診した博士連が、少しでも快く成つた原因が分らなくて、不思議だといつてをるのぢやから、快いのが悪いのやら、更に判然しないから決して油断はならないよ。」

「眞箇でございます、ですから警戒を怠らないやうに、十分の豫防手當をして、順次快くする外ないのでございます。」

「ところで、伊藤外相と、寺山天聲の兩家へ佐分を代理として、致親が世話に成つた御禮に遣らなければならぬから、誠之進へ申附けて、取計はせて下れ。」

「畏りましてございます、早速申し附けるでございませう………」
と公爵の病室を去つた。

ひるがへ 翻つて召使共の致親に對する取沙汰如何を窺へば、

「桔梗さん、貴女若様を御覽遊ばして？」

と藤園が問ねた。

「は、まだ御目通りは致しませんが、御顔は拜みましたわ。」

「何う御覽遊ばして？」

「大きな聲では申されませんが、御行衛さへ知れなかつたと申す御話でしたから、御前様の御落胤にせよ、どうせ普通の書生さん同様、亂暴な方だと思つてゐたけれども、想像と見るのとは大變な違ひで、有繫御前様の御落胤だけあつて、縦から見ても横から見ても、立派な貴公子でゐらつしやる上に、お静で、お優しく、御勉強ばかり遊ばしておゐつしやるんですもの、惚々するわ、楓さんがお附に撰ばれなすつたさうですが、羨ましいぢやありませんかね。」

「あれほど御風采の良い若様は、御同族の中にもお二方と無いと思ひますわ、全で

お芝居で観る、若殿様見たいぢやございませんか。」

「をや〜貴女も讚美派でゐらつしやるしの、恁麼に憧憬者が多くては、随分心配ですわね。」

「しかし楓さんも、御附とは申すものゝ、御衣服や、お床などの御世話を遊ばすだけで、初中終お附申してゐらつしやるのではないさうですよ、奥様から楓さんをお附に定めると仰やつたらば、女中は成だけ遠慮さして下さいと、御断り遊したさうですわ。」

「まあ、何といふ御嚴正でゐらつしやるんでせう、ます〜御慕しく成るぢやありませんか。」

「まあ我々とした事が、身分を忘れて鳥辭がましい、雲井に近き御方に、女中風情が慕へばとて、高嶺の花と同じこと、眺める事は出来るけれど、何うしてお傍へ寄られませう、叶はぬ事と諦め遊ばせ、ほ〜ほ。」

煩悶

優が御室家へ入籍して、致親と改名した當時であつた。秘密に履行された入籍手續が、何うして世間へ洩れたものか、大新聞として勢力を有する東京日報は小公爵の標題の下に、致親の人と成を、高木長兵衛が神田猿樂町で、薪炭商を營みつゝ有つた當時より説き起して、孝行新聞賣の美名を得て、東京府知事から表賞されたこと、外務省の給仕として在務中、刺客大東進吾に組附いて、伊藤外相の危難を救ひ身に重傷を負ふたこと、伊藤外相がそれを恩として、致親の優を自邸に引取つて、中學に入れたこと、其歳荒川堤の觀櫻會に於て、外務書記官佐分誠也の危難を救けたこと、學業の傍ら畫伯寺山天聲に師事して、繪畫を研究したこと、如何なる事情あつてか、伯爵家を無断退出して、寺山家へ移つたこと、頭腦が明晰で、繪畫の揮毫は、天才的であること、その上、容貌風采が貴公子式であること、かく幾多の

波瀾と、苦き経験とを、少か十七年の短日月に味ひ來つた一青年は、誰あらう、五攝家の随一として、將又貴族中の名門として内外に名聲と徳望を有する、従一位勳一等公爵御室隆致卿の落胤で、故在つて前記高木長兵衛が、生れ落つると間もなく貫らひ受けて育てゝゐたこと、御室公に世嗣が無いために、遂に此度高木家から、御室家へ迎へ取られて、世嗣と定められたまでの、長い經歷を、會話體に記したのであつた、公爵家ではこの新聞記事を見ると、多少の迷惑を感じぬではなかつたがしかし總てが事實であるから、其儘に放任して置いた。

これを読んだ伊藤伯爵の令嬢露香は、驚き呆れて、寸時は啞然として新聞を讀めてゐた。

「優さんが、御室公爵の落胤？ 眞箇のことか知ら……始めて逢つた時から、汚い扮装してゐても、何處か下等社會の小兒とは、變つた所があつたけれど、豈夫公爵の落胤とは思はなかつたわ、しかし何といふ好運な方か知ら……いくら御落胤

だからといつて、公爵家に御子息がゐらつしやれば、御相續なさる理には行かないであらうけれど、幸ひにお一人もゐらつしやらないなんて、こんな僥倖な方つてあるものぢやないわ、私其後の御消息が知れないから、何うしてゐらつしやるかと、どんなに心配してゐたか知れないけれど、この新聞で見ると、彌張寺山さんの宅にゐらつたのだね……私が這麼に失戀して煩悶してゐること、御存じなくて、もう私の事忘れてゐらつしやるか知れないわ、男心と秋の空といふ位だからね……一度逢ひたいわ、何とかして逢ふ機會はないか知ら……以前の境遇と違つて、今日は華族の中でも、一二に指を折られる、御室公爵の相續者にお成りなすつたのだから、いくらお慕ひ申したからとて、戀が遂げられは致ないけれど、それでもせめてお慕ひ申してゐることや、失戀の煩悶に陥つてゐることをお知らせ申したいわ……屹度學習院へ通學なさるに相違ないから、御通學を途中で待つてゐるやうか知ら……左に右佐分の兄様が入來して、何とかお話なさるに相違ないから、そのお話

を聞いた上で、何とか方法を考へて、お目に懸ることにするわ……父様や母様、まだ御存じないのか知ら……屹度今日では、若様々々で、何方へ往らつしやるにも、お供が附いて、自働車かお馬車でお出に成るに極つてゐるから、御容子もすつかりお變りなすつたに相違ないわ……思へば全で夢のやうだわ、この春まで宅の食客でゐらした方が、公爵の若様……呶々逢ひたいね、逢つて胸の煩悶が打明けて了ひたいね、優さんは、私のことを何とも思つて居らつしやらないのか知ら……世の中つて何うして思ふやうにならないものか知ら……」

と焦心たさうにいつて、果は優の寫眞を取出して眺めるのであつた。

探偵の活動

今しも朝鮮國京城の陸軍官舎で、陸軍歩兵少佐國弘鹿造と相對して、語合ひつゝ、あるは、警視廳の探偵平松繁吉である。渠は殺人犯の搜索に就いて、是非朝鮮へ出

張致なければならぬ事に成つてゐた折柄へ、芝警察署長から、警視廳へ雪舟の軸物探偵の相談があつたので、遂に其探偵をも囑托されて、國弘少佐をば訪ねたのである。

「遙々京城まで、貴方を訪ねて來ましたのは、他の事柄ではないです、今より四年以前の春の事です、雪舟の描いた羅浮仙の掛物を、貴方の手から、麴町區一番町にゐる阿部忠恒といふ人に、賣却されたことがあります、御記憶ございませうね。」

と問ひかけた。この意外なる尋問には、國弘もギクリと胸に應へたが豈夫に知らぬいとも答へられないので、

「記憶してをりますが、あの掛物が何うか致しましたか。」

平然と答へた。

「はい、少々取調べなければならぬ必要が起つたのですが、あの掛物は以前から

御所持してゐらしたのでせうか、それとも他から御買求めに成つたのでせうか。」
 「あの掛物は恁ういふ理です、私が一師團へ在勤の頃、青山南町の青山館といふ下宿屋に下宿してゐた頃、其下宿の若者に、太郎と呼ぶ男がゐて、下宿人の世話などしてゐましたが、其後私は他へ移つて、遂には妻を迎へて四谷の永住町へ一戸を構へたのです。すると某日突然、太郎が訪ねて来て、雪舟の掛物を買つて呉れないかといふものだから、何うして掛物など持歩いてゐるかと問ねたところが、當時日本橋の骨董屋に雇はれて、店員と成つてゐるが、某方から内々でこの軸物を買取りましたけれど、店員が主人へ無断で、賣買する事は、確と禁じられてゐるものですから、いくらか利益があつたら、賣つて了ひたいと思つて、赤坂方面へ、主人の用向があつたのを幸ひ、買つて頂かうと思つて持つて来たといふから、一見したところが、眞偽の鑑定が就かないものだから、二十圓で買つたといふから二十五圓に買ひ取つて、阿部恒忠のところへ、鑑定をして貰ひに持つて往つたところが、雪舟の眞

と物語つた。

「其太郎が雇はれてゐる家は何といふ家でしたか、御記憶ありませんか。」

「日本橋區新右衛門町の何とかいふ骨董店だといつたのですが、必要がないから記憶してゐませんけれど、しかし果して其家にゐるかゝる疑問ですよ、宛て出

蹟であるばかりでなく、非常な珍品だが、御譲りにはならないかといふ事だから、買いたい人があれば譲つて宜しいつたら一兩日貸て呉といはれて、其儘預けて歸つたところが、意外にも三千圓で譲受けるといふ事であつたから、望通り譲り渡たけれども餘りに高價に賣たから、太郎なり以前の持主に五百圓も遣うと思つて、太郎へ向けて來やうに書面を出したけれども其店が知なくて、書面は其儘附箋して返つて來ので、其中に太郎が來であらうと、待つてゐたけれども、其きり顔を見せないのだから職務も多忙だし、彼是で忘れてゐる中に、突然此方へ轉任を命せられて來た次第ですよ。」

した書面が戻つたのですからね。」

「それは太郎其人がゐないといつて返つたのでせうか、それとも骨董店が全然無いといつて返つたのでせうか。」

「骨董店が知れないといつて戻つて来たのです。平松刑事は小首を傾けて、

「は、はア、それは變ですネ……しかし青山館に往けば、何方の者が太郎の在籍地は知れるでございませうね。」

國弘少佐は事もなげに、

「雇入れて使用してゐた位だから、青山館では無論知つてゐたらうと思ひます。」と答へた。

「太郎の姓は何といひましたでせうか。」

と平松が問答事項を、手帳に記しながら問ねた。

「さあ姓は何といひますか、唯太郎々々で通してゐましたから、姓も知らないですよ。」

「それでは、御迷惑でございませうが、唯今承はつた顛末を、一寸記しますから相違無いといふ御證明が願ひたいものですね。」

「證明なぞ致なくとも、私は身分ある軍人ぢや、いつた事をいはないなぞとはいはないから、安心してゐるが宜い。」

「決して貴方を疑つて申す理ではないのです、これが爲に故々出張を命せられたのですから、復命上必要ですから、御證明を願ふまでの事です。」

「君が困るといふのなら、證明はして遣るが、しかしぢや、一體何が爲に故々取調べに来たのだ、それを聞かうではないか。」

「宜しうございます、御話致します、實はあの掛物は贓品なのでございます。」
「え、ッ、贓品だ……へえ、それは意外だね……それでは太郎に賣つた奴が、

何處で盗んで来たのかな被害者は何者です。」

「被害者は高木優といふ人ですが、彼の掛物は御室公爵家から出た品です。」

「高木優！ 高木優といふのは、若や伊藤外務大臣の屋敷に食客をしてをる少年ぢやありませんか。」

「私は詳しく知らないですが、外務大臣の屋敷にゐた事のある人ださうです、貴方御存じですか。」

「あの高木優なら能く知つてをる、伊藤外相は、私の叔父に當るのだからね。」

「左様でございますか、御親戚でゐらつしやいますか。」

「あの高木なら、以前新聞賣をしてゐて、それから外務省の給仕に取立てられて、外務大臣の遭難を救つた關係から、伊藤家へ引取つて世話して遣つてゐたのぢやがその高木があんな立派な掛物なぞ持つてる道理がないが、何うして持つてゐたのでせう。」

「さあ、其邊の消息までは分りかねますが、警察へは、其高木といふ人から、盗難届が出てゐるさうです。」

「何にしても、贓品と聞いては驚かざるを得ないね、それで當時あの掛物は、何人の手に在りますか。」

「阿部といふ人から、伯爵の勘解野さんへ渡つて、勘解野さんから、濱野茂馬といふ人の手に入つてをるのです。」

「すると、あれが贓品である以上、現在の所有者から高木の手に返さなければならぬいでせうが、然うなると、順次代金を辨償致なければならぬいでせうね。」

「さあ、其邊は如何になりますか、御確答は出来かねますけれど、何しろ三年餘を経過して、三者四者と轉々してをりますから、或は相當代金を被害者から賠償致なければ返戻を受ける事が出来かねるかも知れかねますね。」

圓弘はやく安心したやう。

「なるほど、それは然うなくちやならない理だね、買ふ人は贓品といふ事は知らず
に買ふのだからそれが贓品である事が分つたからといつて代償なしに取返された日
には何品でも安心して買ふ事が出来ない事になるからね。」

「それではどうか御証明を願ひます。」

と平松刑事は、國弘との問答を記して、それへ記名捺印を促した、國弘は不本意な
がら一讀した後署名捺印して渡した。

「どうも、御手数を煩はしました。」

と平松は、叮嚀に禮を述べて、内地を差して歸つた。

噂

高木優が御室家へ歸つた翌々日であつた。伊藤伯爵家では、主人嘉徳と咲子夫人
とが、一室に會して、優の事に就いて、頻りに語合つてゐた。

「どうも何處かに争はれない、氣品は持つてゐましたけれど、豊夫御室様の落胤で
あらうなぞとは、夢にも思つてゐませんでした。不思議なこともあればあるもの
です。それ、それに私が興味を感じますのは、佐分との關係なんですわ、御承知の通り
佐分の家は、御室家の重臣で、十數代の家柄だと申すのでせう、現に誠之進さんは
今日家令を勤めてゐるほどですから、餘程深い關係に相違ないと存じます、その佐
分が、優さんを御落胤と知らずに、由縁や露香に頼まれて、中間の新聞賣に苛めら
れてをる所を、救けて遣つたのが、縁の端に成つて、養母の病死した時の世話か
ら、外務省へ給仕に入れたり、随分と陰になり陽に成つて、世話をしてをりました
が、今日に成つて見ると、それが御主人様なんですから、佐分の方でも高木々々と
呼棄にしてゐたのを、俄に若様と申さなければならぬから妙な感じがするでござ
いませうし、優さんの方でも、佐分々々と呼棄にするのが變でせうから、當分双方
が遠慮するであらうと、然う想ひますのですよ。」

と夫人が笑ひながら語り出した。

「ところが、佐分の話に依つて見ると、實に惻愴な者だよ、佐分に對つて何ういふかと思ふたら、今日までの鴻恩は、終生忘れはしないけれども、意外の事から、主従の關係、それも譜代の關係で、今更斷つに斷たれない深い關係であるさうだから、恩人へ對して呼棄にするのは、如何にも人間の道でないけれども、しかし苟めにも公爵家の世嗣と成つた以上、公爵家の面目として、その威嚴を保たなければならぬから、心苦しくも今後は主従の分を明かにする必要があるから、佐分々々と呼ぶから、忍しからず承知して貰ひたいと、然ういつたさうだ。」

「へ、左様ですか、それで佐分は何と申してをりました。」

「佐分もあゝ言ふ才物だから、欣んでをつたさ、暗愚な相續者でも、傳承的主従の關係がある以上、彌張主人として敬意も拂はなければならず、重臣の義務として、何彼の世話もしなければならぬけれども、あの人ならば、これから十分に教育さ

へすれば、確に自今の公爵よりも、傑出した公爵に成れる保障が出来ますから、及ぶだけ注意して、立派な公爵を作り出して主人とも、家臣と呼ばれて、お互に恥かしくないやうにしたいと、寧ろ楽しんでゐるといつてゐたが、十七の青年として、公爵の世嗣に成つたからといつた餘程の傑物でなくては、然ういふ挨拶は、なかく出来るものぢやないが、この青年は、將來天下の大權を握るやうな、偉大な人間に成るかも知れないよ、十三の少年で、白刃の下を事ともせず、刺客に組附くだけの勇氣を膽力があるんだからね。」

「けれども、下等社會で成長したのですから、御室家のやうな、立派なお家柄に入つては、随分困る場合がございませうね。」

「ところが、もう其日からすつかり小公爵に成り澄して、公爵御夫婦始め、大勢の召使まで、感心してゐるさうだ。」

「へえ、感心なものですな。」

「何うして豪いものだ、始めて公爵や親族方に對面した日に、御相談の上で、愈々相續者に決定して、其ことを改めて、告げられた時、民間に成長して、悲惨な境遇を経て来た身の上だから、畏くも宮中と關係のある、名門の相續者と成る資格がないから、平に辭退するといつて列席の人々を敬服させたといふのだもの、立派な相續者が出来たものさ。」

「へえ、あの口敷を利かない人が初めての御對面、そんなことを申したんですかね、なか／＼確り者ですね、大きな聲では申されませんが、慙うして見ると露香は人を見抜くの明がございますね。」

と微笑むのであつた。

「露香の一件でも然うぢやないか、普通の青年ならば、戀のために恩義を忘るののが一般であるのに自分の一身を處決して、恩義に背かず、戀に陥らなかつた點は、確に彼の傑出してゐるがため、敬服するの外ないぢやないか。」

と推賞した。

「大層お氣に召しましたね。」

「何しろ私と彼人とは、深い關係があるので、三年間引取つて世話はした、けれども、それは一命を救けられた、報恩の爲に世話をしたので今後と雖も、恩人として敬意を拂はなければならぬし、そのみならず、公爵の御世話で由縁を佐分へ遣つてある、其佐分は公爵家の重臣であつて見れば、X形の關係を生じてゐるから、願くは偉大の勢力ある公爵に育てたいと思ふのだ。」

「その上に、露香でも貰つて頂けば尙更關係も厚くなる家門の名譽にも成りますけれど、由縁が家臣の家へ往つてゐますから、それは到底望まれないことですね。」

「それは無論のことだ、堂上華族の中でも一二を争ふ名門である上に、宮中との御關係が深いから、結婚といふことに就いては親族始め、宮中の御意齋も伺はなければならぬから、決して望むべきことではない。」

かゝる話半へ小間使が来た。

「唯今、佐分様の大旦那様が御越しなさいましてございます。」と告げた。

「なに、佐分の御親父が見えた？ 何用で来られたか知ら……お前出迎へて客室へ御案内するが宜い。」

と咲子夫人へいつた。

「何御用で入来しつたのでせうね。」

夫人も不思議相にいつて、小間使と共に室を出た。而うして急いで玄関の方へ出た。

見れば佐分誠之進は禮服を着用して、従者をして、持參の品を自働車の中から出させてゐる時であつた。

咲子夫人は和かに迎へた。

「これはく、能くこそ御越し遊ばしました、どうか御通り遊ばしませ。」

「突然伺ひまして失禮でございます、御辭に従ひまして失禮致します、御免下さい」と、夫人の案内に連れられて奥へ通つた。

寒暖の挨拶を互に交換した後、

「實は今日は、御室公爵家から、公爵の代理として伺ひましたのでございます、御令息様が、多年一方ならない御世話をお受けなさいましたさうでございますが、此度公爵家へ御迎へに成りまして、御名も致親と御改名遊ばしましたので本來ならば公爵が親して御禮に參られる筈ですが、御存じの重患で病床にゐられますから、取敢へず私に御挨拶旁々御禮に上るやうにとの仰せでございます、かく突然伺つた次第でございます。」

「左様でございますか、誠也さんから聞きました、あの方が御室様の御息様で、らつしたことを、始めて承つて驚きましたんでございますよ、不思議な御縁で、

御世話を申してゐたのでございますけれど、本年の春突然屋敷を出てお了ひなすつた限り、更に消息が知れないものですから、非常に心配してをりましたが、この度無事にお屋敷へ御歸りなさいましたさうで誠に安心致しましてでございます。「就きましては、これは誠に軽少な品でございますけれど、御世話に預りました、御恩を忘れない験までに、進上致せとの仰せにございますから、どうか御笑納下さるやうお願い申します。」

謝 禮

誠之進が進めた進物を見た咲子夫人は、

「然ういふ御心遣ひに預る筈はないのでございますから、一應主人に申聞けまして其上御挨拶申上げる事に致します、幸ひ今日は在邸でございますから、どうか御緩りと御遊び下さいまし、私は一寸失禮致します。」

と夫人は客室を去つた。ところへ小間使の女が、茶と菓子とを進めて去つたかくて寸時すると、伊藤伯爵も禮服で入つて来た。

「能くこそ御入來に成りました、公務多端の爲に無音に打過てをりますが、いつも御健勝で結構です。」

と先づ伯爵が挨拶した。

「私こそ左右御無沙汰致しまして申譯がございません、御存じの通り公務、同様に各名家へ勤めてをります爲に、何れへも意外の御無沙汰致してをりますのに、近來は公爵が御重患のために、益々忙殺されました、一時は晝夜詰切の状態でございますから、無音の上の無音で、御詫の申しやうもございません。」

と誠之進も挨拶した。

「唯今妻から承はれば、今日は御室様の御代理として、御令息を御世話に申した、御禮の爲に御入來下さつたさうですが、改つて御禮など受けるのは、却つて迷惑す

るのです、何故かと申しますと、御聞及びもありませうが、私は刺客に襲はれて、既に一命の危い所を、あの人が一身を顧ず助けて呉れた其報恩の爲に、引取つて世話をした理で、若し禮をするにすれば、私の方から爲すべき筈ですから、必ず御心配下さらないやうに願ひます。」

「御辭退下さるやうな大層なものではないのでございます、御禮と申せば、語弊がございませうけれど、御厄介になられました若様が、此度御所在が知れて御迎へ申されたものですから、唯々御挨拶の驗迄に、輕少の品を持參したまでの事でございますから、どうか御笑納を願ひます。」

「強ひて辭退するは、却つて御厚意に背く事に立至りますから、それでは遠慮なく頂いて置きます、何れ御禮には改めて伺ひますが、憚りながら宜しく御傳への程を願ひます、尙御子息も、時々御遊びに來られるやうに、御傳言を願つて置きます。」

と挨拶した。

「必ず御傳へ申します。」

「しかし、人の世には測るべからざる意外な事が出来て來るものですね、あの人が御室様の御子息などは、恐く何人も知らなかつたでせう、誠也君の推選で、外務省の給仕にして、私の専屬にしたのですが、其時から、活潑な、伶俐さうな少年だとは思つてゐましたがあれほど勇氣のある、あれほど大膽な、あれほど頭腦の明晰な少年とは知らずにをりましたが、愈よ宅へ引取つて、教育するやうに成つて、其穎敏な才と、明晰な頭腦とは、益々光輝を放つて、中學に入つては始終優等の成績を得る、繪書を學べば、忽ち上達して、天才的だと評される、平素は寡言沈黙で至つて靜肅だが、必要が起れば、滔々諤々と雄辯を揮ふ、近時の青年としては、得難い好青年であると認められたものですから、十分の教育をして見たいと、將來を樂んでゐる中に、突然無斷で踪跡を晦まして了つたものですから非常に失望してゐたの

ですが、それが御室様の御令息であつたといふに至つては、實に驚くの外はないです、去りながら、御室家の爲には慶賀すべき、好令嗣を得られたのですから、公爵も定めて御満足の事と御察し致します。」

「多年民間に在つて、悲惨を味はれたのですから、所在を捜して失望されなければ宜いがと、密に心配してをりましたが御伶俐な爲に、非常に御満足でございます。」

太郎の行衛

窃盗事件の探査を遂ぐべく朝鮮まで出張した平松探偵は、國弘少佐を取調べた結果、累犯罪者の端緒を得たので、急いで歸京した、而うして警視廳の主任警部へ、取調の結果を報告して、國弘の證明書まで添へて出した。同時に芝警察署へも捜査の結果を報告した。

それが爲に、芝署に於ては、太郎の處在を捜査すべく活動を開始した。

時は午前十時頃であつた、赤坂區青山南町の下宿屋青山館へ往つて、主人山田定市と談話しつゝあるは、芝警察署の探偵川上順六である。

「今より四五年以前、お前の家へ、國弘鹿造といふ陸軍士官が下宿してゐた事はなにか。」

と山田へ問ねた。

「國弘さんは、中尉時代から大尉になるまで私の家にゐられましたでございます。」

「その頃お前の家の奉公人に、太郎といふ若者がゐた筈だが、覺があるぢやらうな。」
「太郎……へえくゝゐますでございます、確か國弘さんがゐらした頃だと思ひます。」

「其太郎は、何ういふ關係から雇入れたのか其關係が詳しく聞きたいものだね。」

「一寸お待下さい、奉公人は折々代るものですから、取調べて見なければ、詳しいことは知れないのでございます。」

「能く調べて見て下れ。」

「まあお掛けなさいませ。」

と主人は帳場へ往つて、一冊の帳簿を出して調べ始めた、川上探偵は上櫃へ腰を掛けて、何事か熟と考へてゐた、

やゝ寸時経た頃、主人は帳簿を手にしたまふ、川上探偵の傍へ来た、

「漸く分りましたが、手前共にをりましたのは、僅か四ヶ月ばかりでございます。」

「お前の方から暇を出したのかそれとも、先方から暇を取つて出て往つたのか。」

「へえ、少々不都合がございました、手前共から出しましたんでございます。」

「不都合があつた！ 何ういふ不都合があつたのだ。」

「御客様の御不在中に、御室へ入つて机の抽斗を捜してゐたのを、下女が認めて知らしたものですから、早速暇を出したんでございます。」

「何處の者かね。」

と探偵は手帳を擴げて鉛筆を手にした。

「神田區神保町五番地遠藤太郎と記してございます。」

「上總屋といふ口入屋は、今日でも營業をしてるか知ら……」

「へえ、盛んに營業してゐられます。」

「太郎は此處を出てから、何處へ往つたか、それは知らないかね。」

「はい、少しも様子を聞きませんでした、宅を出ましてから、小一年を経つた頃下宿してゐられた軍人方の轉宿先を聞に來たさうですが、其時の話には、日本橋仲通の骨董屋さんに、奉公してをると申したさうですが、詳しいことは知れないのです。」

「すると上總屋へ往つて、聞けば、詳しいことが分るんだね。」

「へえ、上總屋へ往つてお聞きになれば、屹度知れると思ひます。」

「では上總屋へ往つて調べて見やう大きに邪魔をしたね。」

「太郎が何か悪事でも働きましたんでございませうか。」

「太郎が働いたか、誰が働いたか、それはまだ判然しないが、少し當人に逢つて取調べなければならぬことがあるんだ。」

「左様でございませうか。」

「上總屋といふのは何の邊だ。」

「一丁目八番地でございませう。」

「然うか、とんだ邪魔をしたね。」

川上探偵は別を告げて出て往つた。

青山館を出た川上探偵は、直に上總屋といふ雇人口入業の家を訪ふた、而うして女主人大瀧つちに會つた。

「少々問ねなければならぬことがあつて來たが、今から五年以前のことだが、お

前の家の周旋で、遠藤太郎といふ者を、青山館へ入れたことがあるさうだが、あの男はどういふ手續でお前の家へ來たのだらう、それが聞きたいのだ。」

「あの人は別に手續があつて來たのではなく、自分で料理店か、下宿屋のやうな處へ奉公したいから、周旋して呉れと仰やるものですから、それで青山館へ入れましたのですが、四五ヶ月で御暇に成つたやうに存じてをります。」

「して、其後何處にをるか知つてをるかね。」

「私共では、それきり手を放しましてございませうが、ツイ先達て偶然會ひましてございませうよ。」

「何方で逢ひました。」

「四谷見附の電車の交叉點の處で、ひよつくり出會いましたから、何方にゐますかと問ねましたら、鮫ヶ橋の大長屋にをるから、是非遊びに來て下れといつてましたか近頃は世帯でも持つたと見えて、小奇麗な女と一緒にでしたが、圓鬚に結てましたか

ら、屹度妻なんでもございませうよ。」

「鮫ヶ橋の大長屋！ 番地は聞かなかつたかね。」

「訪ねて行く必要のない人ですから、番地などは聞きませんでした。」

「どんな風體をしてみました！」

「外套など着込んで、大黒帽子を眉深に冠つて、なか／＼工面が好き相でしたわ。」

「然うか、それでは鮫ヶ橋へ往つて調べて見ることに致やう、邪魔をしたね。」

「何う致しまして……」

川上探偵は、小躍りして上總屋を出た、而うして四谷鮫ヶ橋へと急ぐのであつた。

程なく四谷の貧民窟と呼ばれる、鮫ヶ橋へ着いた。が何しろ、同じ長屋が幾ヶ所もあるので、單に大長屋とばかり尋ねても、容易に知れない、苦心に苦心を重ねて漸く俗種大長屋を捜し出した。

かくて遠藤太郎といふ門標を捜したが、何うしても見當らない爲に、殆んど戸毎を訪ねて見たが、遂に知れなかつた。川上探偵は、尋ね飽んで、到頭芝署へ引返へして、其旨を報告した上、這度は本籍地の神田神保町へ往つて尋ねて見たが、神保町五番地には似通つた姓名すら無いために、愈よ太郎の身に疑をかけて、再び鮫ヶ橋へと向つた。

「あれほど戸別に探して知れないところを見ると、變名でもしてをるのぢやないか知ら……悪事を働く奴等は、大抵變名を用ひて、踪跡を晦ますが常だからね……さもなければ、何處の家へ同居してゐて、互に隠蔽致合つてゐるのかも知れない、上總屋の主人へ嘘を吐く筈はないからね。」

かく考へつゝやがて再び鮫ヶ橋へ着いて。

又も熱心に搜索するのであつたが、不斗小かな煙草店のあるのに氣が附いたのでつか／＼と店頭へ進み寄つた。

「敷島を一箇下さい。」

「はい。」

と小さいマツチを添へて煙草を出した、川上探偵はそれを受取りながら、

「少々物をお問ね致しますが、鮫ヶ橋の大長家といふのは、この先の長家より外にはないんでせうかね。」

と問ねた、店番の老婆は、其顔を眺めながら。

「その大長屋といふのは、これから三丁ばかり先を左に曲つたところに有りますが今は大長屋といふのは名ばかりで、此方の長屋が立派に成つたものだから、此方へ名を奪られて了ひましたか本當の大長屋といふは彼方ですよ。」

と告げた。

老婆の答を聞いた川上探偵は、又も欣び勇んで、大長家を探すべく、禮を述べて立去つた。而うして教へられた通り、二三丁を辿つて、左へ曲つて問ねて見た。

「少々物をお問ね致しますが、此邊に大長家といふ長家はないでせうかね。」

「この奥の十八軒長家が、以前大長家といはれてゐたんですよ。」

と顔も出さずに、中から女の聲で答へた。

「どうも有難う……………」

と川上探偵は勇んで大長家へ向つた、而うして一間半間口の古長家を戸毎に標札を眺めて歩くのであつたが其入口から十三軒目に、遠藤と小さい標札があるのを見た、

「しめた……………」

と心に欣びつゝ、密に内の様子を窺ふのであつた。すると内には、三四人の男女がゐて、賑しく笑ひ囁めく聲が聞える、時分は好しと見て取つた川上探偵は、入口の格子戸をガラリと開けて入つた、見れば太郎らしい男を中心に、若い女が三人、蜜柑を食べながら、頻りに喋々話してゐる所であつた。

「太郎さんのお宅は此方でせうか。」

と茫乎した態度で問ねた。

「え、太郎の家は此處ですが、何方からお入来なすつた。」
と太郎らしい男が問ひ返した。

「青山の青山館から聞いて来ましたが、御宅でせうか。」

「然うですか、太郎といふのは私です、まあ御掛けなさい。」
すると川上探偵は、忽ち態度を一變して、

「私は芝署の川上刑事だが、お前に尋ねなきやならない事件があつて連れに来たのだ、直に同行するが宜い。」

と嚴かにいつた、太郎は固より一同の女も顔を見合せて、驚くのであつた。

「何ういふ事件だか知らないが、此處で御問ね下さる理には參らないでせうか。」

「それは成らない、第一私は署長の命令に依つて、お前を引致に来ただけの事で、問ねやうにも、事件の内容が分らない。」

「連れて往くと仰やれば、止を得ませんから、附いては往きますが、しかし何の事件くらは分つてゐるでせうが、一體何の事件でせう。」

「さあ、詳しい事は知らないが、女に關係の事ぢやないか知ら………」
と空惚けた事をいふ、

「女の關係………笑々笑談仰やつちや不可せん、私のやうな無粹な人間が、女などの事件が何うしてあるものですか。」

「いや、お前は女蕩しのやうに見えるから、そんな事件だらうと思ふのだ、まあまあそんな事は何うでも宜いから、私と一緒に来るが宜い、警察まで往けば、事件の内容は直に分るさ。」

「御供は致しますが、若や直に放免にならなければ、嬬が困りますから、留守中の相談を致なきやなりませんから、相談の済むまで御猶豫を願ひます。」

「寸時待つて遣るから、成だけ早くするが宜い。」

「承知致しました。」

太郎は、女房お吉を片隅へ呼んで頻りに何事か密談してをつたが、お吉は有紫に當惑顔をしてをつた、しかし太郎の悪事をする事は、承知の上で内縁の妻となつてをるのであるから、差當つて當惑は致たものゝ、普通の妻女のやうに、泣き愁しむが如き事はなかつた、蓋しかゝる事のあるべきは、豫め覺悟してをるからであらう……やがて太郎は衣類を着換などして、他の女に打向ひ、
「私は御用で芝警察へ引かれて往きますから、どうか後々を宜しく願ひます。」
「まあとんだ災難ですぬどうか、お早く歸つて上げて頂戴ね。」
「直に歸つて來ます。」

自白

芝警察署の一室で、嫌疑者遠藤太郎を取調べつゝあるは、正木警部である。

「其方の原籍並に目下の居住地は何方だ。」

「原籍は神田區神保町五番地ですが當時は四谷區鮫ヶ橋町九十二番地に居住してをります。」

「神田神保町に在籍したのは、今のことではなく以前のことでないか。」

「いゝえ、唯今でも神保町に籍がございます。」

「確に在るか。」

「へい、確に在ると思ひます。」

「お前には親兄弟は無いか。」

「へえ、親父はをりましたが、もう亡くなりました。」

「それで目今はお前一人か。」

「左様でございます。」

「だが、神田神保町五番地は、既に取調べさせて見たが、遠藤太郎なんといふ者は

在籍者に無いといふが何うちや。

「無い道理はないですがね………」
と考へてをつたが、

「それぢや、私が十何年といふもの家を飛出した限り、歸つて往きませんから、家主の方で、行衛不明の届でも出したんでせう、それがために無籍者に成つたのぢやないでせうか。」

「一體お前の親父といふのは何者ぢやつた。」

「角兵衛獅子の太鼓打でした。」

「母親は何うしたのだ。」

「母親は、外に男を作つて、駈落して了ひました。」

「するとお前は一人兒か。」

「いゝえ、私は拾ひッ兒です。」

「拾ひ兒とは何ういふ理由だ。」

「私が六歳の時に、迷兒になつて泣いてゐたのを、親父が通りかゝつて拾つて歸つて育て、下れたんださうですから、拾ッ兒といふのです。」

正木警部は太郎の答を熟と聞いてをつたが忽ち察し得たやう。

「それで分つた、して見るとお前は無籍者に成つてをるに相違ない、お前は幼少の頃だから記憶が無いであらうけれど、拾つたといふのは口實に過ないので、屹度角兵衛獅子にする意で、誘拐したに違ひない、渠等の仲間には、然ういふ悪事を働く奴が、澤山にをるのだからね、迷兒ならば、其筋へ届けさへすれば、親の手許へ歸る筈なのに、拾つた者が其儘育て、居るといふは、確に誘拐された證據だゝめにお前の籍は入れることも、附けることも出来なくて、無籍に成つて居るに相違ないのだ。」

「へえ、然うでございませうかね、私は神保町五番地に居りましたから親父の籍に

附ついて居まるものとはばかり思おもつて居まりましたがね……」

「何なにうちや、これまで悪あく事じをして、處しょ刑けいを受うけたことはないか。」

「へい、まだ處しょ刑けいされたことはございせん。」

「當時たうじ其その方ほうは何なんをしてをる。」

「へえ、これといふ商しょう賣ばいはありませんが、相さう場ばを少せう々く宛づ行やつとりります。」

「相さう場ばとは何なんのことだ。」

「蠣かき殻がら町ちやうへ往いつて、米こめ相さう場ばを行やつて居まります。」

「年とし齡れいは幾いく歳さいだ。」

「二十四歳にじゅうよっさいです。」

「其その方ほうは今いまより五ご年ねん以い前ぜん、赤あか坂さか區く青あお山やま南みなみ町まちの青あお山やま館くわんといふ下げ宿しゆくに奉ほう公こうしてゐたことがあるか。」

「はい四月よつき餘あまり奉ほう公こう致しました。」

「其その頃ころ青あお山やま館くわんに下げ宿しゆくしてゐた、國くに弘ひろといふ陸りく軍ぐんの歩ほ兵へい大たい尉いを知しつてをるか。」

「へえ、存ぞんじて居まります。」

「青あお山やま館くわんを出でてから、何いれへ奉ほう公こうして居まつた。」

「へえ、青あお山やま館くわんを出でましてからは、友い人じん宅たくに居まりました。」

「日本に橋はし仲なかつ通とほりの骨こつ董たう店てんへ奉ほう公こうしたと聞きいたが、何なんといふ家うちに居まつたのだ。」

太た郎らうは正まさ木き警けい部ぶの口くち吻ふんに依よつて、嫌けん疑ぎ事じ件けんの國くに弘ひろに關くわん係けいあることを知しると共ともに、

骨こつ董たう店てんへ奉ほう公こうしたかといふ其その尋じん問もんに對たいしては、確はたと當たう惑わくせざるを得えなかつた。が警けい

官くわんへ嘘きよ偽ぎの申まを立したても出で来きないから、寸すん時じ考かうへた後のち、

「日本に橋はしの骨こつ董たう店てんへ奉ほう公こうしたことはございせん。」

と答こたへた。正まさ木き警けい部ぶは眼めを瞪みつて、

「なに、奉ほう公こうしたことはない、日本に橋はしに限かぎらず、何いれにしても、骨こつ董たう店てんに奉ほう公こうした

ことはないといふのか。」

急込んで問ねた。

「はい、骨董店に奉公したことはございませぬ。」

「しからは問ねるが、其方は雪舟といふ畫家の描いた、羅浮仙の圖の掛物を國弘大尉に賣つたさうだが、あの掛物は、何處から手に入れたのだ。」

「あの掛物は、私の友人から頼られました、國弘さんに買つて貰つて遣りました。」
 「友人から頼まれて賣つて遣つた？ その友人は何れの何といふ者だ、詳しく申立てい。」

「へい、その友達といふのは、朽木の光公といひまして、淺草の活動寫真で懇意と成つた男ですが、この二三年影も形も見えませんが國へ歸つたのぢやないかと思ひます。」

「國は何處の者だ。」

「朽木とだけ聞いてをりましたが、朽木の何處の者だか、詳しいことは存じませ

ん。

「東京では何處にゐたのだ。」

「東京では何處に家を持つてゐましたか、家を訪ねたことは、一度も無いんです。」

「それが何うして掛物を頼んだ。」

「私の家へ持つて來たんです。」

「何といつて持つて來た。」

「日本橋の骨董屋に奉公してをる友達が、御華客から頼まれて、主人へ内々買取つたのだが、金子に困るから何處かへ賣つて呉れないかといふが君の知つてゐる人で、掛物の好きな人はあるまいかといひましたので、それでは知つてゐる方があるから、頼んで見て遣らうと、國弘さんへ頼んで買つて貰つて遣りました。」

「其頃其方は何處に家を持つてゐた。」

「へえ……その頃は……」

「其頃何處に家を持つてゐて、光公が掛物を持つて來たのだ。」

「實はその私の家ではなかつたので鮫ヶ橋の大長家にをる、初公といふ友達の家に厄介に成つてゐた時のことです。」

「何故偽をいふか。」

「四年も以前のことですから、確と記憶がないものですから、ツイ思ひ違ひをしたのです。」

「こら、其方は先刻から、彼是と不得要領の挨拶をして、いひ遁れんとして居るがその掛物は、其方が芝區櫻田本郷町の倉田重吉方に於て盗み取つたことは、證據が擧つてをるぞ、何故偽を申す、速に自白するに於ては、軽い處分で済むやうに取計つて遣るが、若し此上偽を申立てるに於ては、最も重い處分を上申するぞ。」

「……………」

「其方を引致するまでには、十分なる證據を取集めた上で、引致したので、決して漠然した理ではない國弘大尉も今は朝鮮に往つてゐられるが、大尉の證言に依つて見ても、貴様が窃取した品であることは明瞭に分つてをるぞ。それでもまだ、友人から頼まれたなど、隠蔽するか。」

「……………」

「若し自白致さないに於ては、内縁の妻お吉と共に入獄させるが、それでも自白致さないか。」

「……………」

「どうぢや、隠蔽すると爲にならないぞ。」

威猛高に問ひ詰めた。それでもまだ無言の儘、首垂れてをつたが、やがて力の無い聲をして、

「恐れ入りました。」

正木警部は得たりとばかり、少しく面色を和げて、

「然うであらう、然うなくてはならない筈だ、速に服罪して、犯した罪を償ふと共に、光榮ある日本臣民の一人と成るやう、戸籍役場へ願ひ出て、戸籍を作つて貰ふが宜い、立派な體を持ちながら、世の中の迷惑に成る、悪事を働く奴があるものかすると其方が倉田重吉方へ忍び入つて、窃取したものに相違無いね。」

太郎は止を得ない事と諦めたやう、

「はい、ツイ心得違を致しまして、私が窃盜致しました。」

「念の爲に言つて聞かせるが、若しこの犯罪以外に、犯した罪が在るならば、この際残らず自白するが宜い、この際自白すれば、數罪俱發の特典に依つて、重い一つの罪に服しさへすれば、他の犯罪は、設令何十犯あらうとも、皆な消えて了ふ事になるのだ。しかしだ、若しこの際それを隠してをつて、後日に露顯すると、露顯する度毎に、相當の刑罰を受けなければならぬから、心得違ひをして隠しては爲に

ならないよ、宜いか。」

「御親切に有難うございました、犯した罪は残らず申上げます。」

「するとあの際窃取した物品は、あの掛物以外に何々盗んだ。」

「詳しく記憶てをりませんが、確か衣類が在つたやうに思ひます。」

「共犯者はなかつたか。」

「へい、一人でございました。」

「國弘大尉に何程で賣つた。」

「二十五圓で賣りました。」

「この掛物に相違ないか。」

と掛物を見せた。

「へい、その掛物に相違ございませんが、何うしてそれが上つたのでございませうか。」

「この掛物は、當時五千圓で買買されてをるほどの名書で、ある公爵家から出た品であるが、その公爵家に必要が起つた爲に、種々搜索された結果、お前の手から出た事が知れて来たのだ。」

「へえ、この掛物が五千圓も価値があるんですかね。それぢや國弘さんもいくらか儲たんでせうね。」

「儲けたどころか、三千圓に賣つたのだから、大層な利益だよ。」

「三千圓!? ……莫迦にしてるね……三千圓もする掛物を、唯た二十五圓より買つて下れないなんて、恚うなりや、何も彼もいつて了ひます。」

と憤慨した様子で、國弘に頼まれて、五十圓の報酬で、佐分誠也を荒川の中へ突落さんとして果さなかつた事、それを己が首領と仰いでゐた小栗五狼に告げて、小栗は國弘から金子を強請取つた事、其外情交ある女を、田舎へ酌婦に賣つた事、賭博に耽つてゐた事、拘摸を働いた事など、これまで犯した罪科を、記憶の在る限り自

白した。正木警部もこの意外なる自白に驚きながら、一々筆記してをつたが、渠の境遇に同情を表して、

「其方が本官の説諭に服して、犯した犯跡を、残らず自白したのは、感心のもと賞めて遣る、處刑を受けて出獄した曉には、もう再び悪事を働かずに、どんな苦い事をして、真面目に働かなければならないよ、其方だつて、誘拐されずに、實の兩親の傍にゐたら、こんな人間にはならなかつたであらうのに、悪い運命に捉へられたから、恚ういふ境遇に陥つて了つたのだ。實の兩親は何處の何者とも知れないか。」

「はい、親父が死にます時に、お前の親は、神田神保町五番地の高木長兵衛といふ人だから、私が死んだら、尋ねて行くが宜いといひましたから、死ぬると直に尋ねて往きました、大火で焼けて了ひまして、何う尋ねて見ても、知れませんでした。」

「知れない道理はないぢやないか、眞個神保町に住んでゐたものなら區役所へ往つて調べて貰へば直に分る筈だ。」

と正木警部が詰るやうにいつた。

「私も然う思ひました、早速區役所へ往つて問ねて見ましたが、區役所も丸焼に成つた爲に、戸籍簿を焼失したから、更に分らないといはれましたので、絶望して丁つたのです、ですけれども、私は角兵衛獅子屋の小兒だなんていはれるのが、可厭でしたから、誰に聞かれても、神保町五番地だといつてゐましたが養父の遠藤久作は、小石川區茗荷谷に住つて、角兵衛獅子の太鼓打を渡世にしてゐたのでございませう。」

「今度出獄したら、新聞にでも廣告して、實父の所在を捜すが宜い。」

「有難うございます。」

「國弘大尉を始め、小栗五狼等の犯罪も、直檢舉して取調べるが、何れも其方と關

係があるのだから、何れ又呼出すであらうが、其時は何も彼も明瞭に申立てるが宜い。」

「承知致しました。」

と、太郎は巡查に連れられて、留置場へ歸つた、正木警部は、署長と協議の上、太郎の自白に依つて露顯した、國弘、小栗等の犯罪を檢舉すべく、井上、川上の兩刑事に内命すると共に、一方國弘の犯罪に就いては、憲兵司令部へ照會して、檢舉の手續を迫つた。

かくて芝警察署は、高木優の代人として探偵を一任された、佐分誠也へ、太郎を捕縛したこと、其自白に依つて、犯人の太郎であつたことを通知すると同時に、國弘の犯跡を確める爲に、出頭方を命じたのである。ために佐分は指定の時刻に芝署へ出頭した。すると正木警部は佐分を應接室へ伴ふて、諄々と問ねるのであつた。

「太郎の自白に依りますと、貴方を荒川へ突落して下れいと、國弘から頼まれて、

實行しかけた所を、他に妨げされた爲に、反對に川へ落たといつて居りますが、眞個然ういふことがあつたでございませうか。」

この質問には、佐分は確と當惑して、頓には答ふべき辭が出なかつた。それは伊藤伯からの依頼に免じて渠の悔悟に依つて、其罪を赦して遣つてあるからだ、それを今更事實であると答へたなら、伯爵へ對して濟まないのみならず、國弘へ對しても、徳義上快しと致ない點あるからである。けれども、既に太郎が自白して、國弘逮捕の手續が履んであるからには、早晚罪跡が露顯するに相違ないが、若し隠蔽して、他日判明した際には、却つて自分の人格を疑はれる虞があると考へたから、遂に決心して、

「國弘から頼まれた結果か否やは、判然致ませんが、左に右荒川岸に立つて、漁夫の網を打つのを眺めて居りますと、私を突落さうとした者があつたのを、傍に居つた高木優が認めて、救けて下れた爲に却つて己の力で川中へ落た事實は確にござい

ましたが、扱は太郎なる者の行爲でありましたかね。」

「すると事實國弘に頼まれたものに相違無いですが、國弘が何が爲に貴方に仇をするのでせう、何か御心當りあるでせうか。」

「私は他人から恨を受けるやうな覺は、更にはないのです。」

「然うですか、それでは國弘を逮捕して取調べたら、其事情も判明するでせう。」

「一體太郎といふのは何者でせうか國弘と共謀するに就いては、何等かの關係があるやうに考へられますがね。」

「それは斯ういふ關係からです。」

と太郎の素性から、角兵衛獅子の太夫元に誘拐されたこと、其太夫元は既に世を去つたこと、交はる友が悪い爲に、遂に悪事を働くに至つたこと、國弘の下宿してゐた下宿屋へ、雇人として使用されてゐたこと、其關係から國弘と知合になつたことなど、詳細に語り聞かせた。」

面影

優の致親は、公爵邸へ歸つて以來、日々老公爵の病氣を見舞ふ事を、怠らないのみならず、學事の餘暇には、例の文部省主催の美術展覽會へ出品の繪畫を、一心不亂に揮毫するのであつた。が、書室の中へは一切出入を禁じて、何人と雖も傍觀を許さなかつた。今も一室に閉籠つて頻りに彩管を揮ひつゝあるのである。

「こんな熱心に描いて、若も入選致なかつたら、寺山先生へも面目なし、他の同僚へ對しても面目ないが何うか知ら……」

と熟と畫面を噴めるのであつた。

「設令入選しなくても、今日の僕には、これ以上の畫は到底描けない、これが最善力を傾倒した結晶だ、僕が描いて見たいと思ふた、其氣分と、其景趣とは、二つながら、遺憾なく捉へ得て、畫面に表現したのだから、これで満足だ、これで入選し

なければ、僕の技倆がまだ及ばないのだ。」

と憧憬するがやう、尙も眼を放さないで、眺めてをつたが、果は會心の笑を洩らしつゝ、又彩管を動して完成を急ぐのであつた。

やがて又筆を佇めて、

「この繪を佐分を始め、伊藤家の人々が見たら、定めて驚く事であらう、入選して陳列された以上は、見られるのは覺悟の上だから、何人に見られても厭はないが、それまでは絶対秘密にして、誰にも見せたくないものだ。」

又和と笑ひつゝ筆を動かすのであつた。かくして遂に出品期日前、遺憾なく描き了つて、出品したのであつた。

すると審査員が審査の結果、入選畫を發表した其結果が、新聞紙上に掲載されたのであるが、致親が出した面影と題する畫は、入選したのみならず、總數百五十點の入選畫中にあつても、佳作として特に附記してあつた。致親は其新聞を見て、心

密に満足するのであつた。

「先づこれで寺山先生に對する責任は果し得たといふものだ、多くの門生中から、特に描いて出せと、選ばれて筆を附けながら、落選でも致やうものなら、先生にも面目ないが、第一熟の人々へ會はずべき面目がないからね、慾にはどうか入賞致したいものだが、それは不可能かも知れない。」

「恚う考へて居ると家令の誠之進が、恭しく、

「若様御目出度う存じます、御出品畫が、入選致しましたそうで、唯今伊藤伯爵夫人から、御祝の御電話でございました。」

と告げた。

「僥倖で入選致しました、どうか伊藤さんへ宜敷御禮をいつて下さい。」

「畏りました。」

家令が罷り退ると、入代つて佐分誠也が入つて來た。先づ正しく一禮した後、

「新聞御覽になりましたでございませうね。」

と問ねた。

「文展の事かね。」

「左様でございます。」

「見ましたよ、私の畫も僥倖に入選したらしいです。」

「どうも御目出度う存じます、外務省では、大臣始め省内擧つての大評判で、開會になつたら、一同拜見に出かけると申してをります、大層なお出來榮ださうにございますね。」

「モデルがあつて描いたのだから、知つた人に見られると、少々面目ないですよ、まあ一度見て下さい。」

「是非拜見致しますが、無論非賣品でございませうね。」

「いゝえ、賣品として出したのです、其代り價格は大枚一千圓だ。」

「左様ですか、御賣りなさいますのですか、伊藤閣下が買ひたいやうにいつて居られましたか。」

「え、伊藤閣下が？ それは困つたね……それでは電話をかけて非賣品に致やう初ての入選だから、記念として納つて置ても宜いからね。」

と當惑の色が見えた。

「伊藤さんに買はれては、何か御迷惑な事でもあるのですか。」

致親は微笑しつゝ、

「まあ、畫を見ると知れるから、一度見て下さい。」

事情は語らなかつた。誠也も強ては問ねなかつた。

「寺山君も、定めてお歎びでせう、先日父の代りに、御室家からのお使として、私が御禮に上つて際にも、若しこの儘畫の研究をお廢めにでもなると、美術界の爲に惜しいものだ、頻りに話してゐられました。」

「これからお禮ながら、審査の状況が聞きたいから、一度訪ねやうと思ふのです。新聞で見ると、本年はなか／＼佳作が多いやうな様子だから、定めて盛會だらうと思ふのだ。」

「どうか優賞を御取に成るやうに致したいものでございますね。」

「それは到底不可能の事だ、優賞どころか、入選が難しいと思つた位な畫だからねまあ、本年入選して、追年に入賞するやうな作品を出すのだね、一年に入選もしたり入賞も致たりしては餘りに贅澤過るからね、は、は。」

「眞箇でございませぬ、時に今日は妙な事をお知らせに上つたのでございます。」

「妙な事とは、どんな事です。」

「高木長兵衛の一子太郎の所在が知れましたのです。」

「え、ッ、幼少の頃行衛不明に成つた、あの太郎の所在ですか。」

「長兵衛夫婦の實子であつた、太郎の所在でございませぬ。」

「それは意外だが、何うして知れました。」

「知れるは知れましたが、御話するも心苦しいやうな運命に捉へられてをります。」

「病氣にでも罹つてゐるのですか。」

「病氣ではありませんが、實は悪事を働いて監禁されてをります。」

「監禁されて、それを君は何うして知りました。」

「不可思議な事があるものぢやございせんか、彼の雪舟の一軸を盗み取つた曲者が、檢舉した結果、太郎の所爲と判明して、目下關係者を取調中でございます。が、聞く所に依ると、角兵衛獅子の太鼓打に誘拐されて、所在が知れなくなつたのださうです、ところが何に致しましても、六歳や七歳の時ですから、それなりに育てられて角兵衛獅子を仕込まれてをる中に、其養父といふのが亡くなつて了つたので、放浪生活をしてゐる間に知らず識らず悪者社會と交つて、今日の境遇に沈んだものらしいのです。」

「だが實父が高木長兵衛と知れた以上、尋ねて歸りさうなものだが、何故歸らなかつたのだらう。」

「それは養父が臨終の際に、誘拐の當時、腰に附けてゐた、迷子札を出して、長兵衛といふ事を知らせたから分つたのださうですが、早速神田神保町へ尋ねて往つたら、其時は大火の後で、區役所の戸籍簿が焼失した爲に、生死は固より何れへ立退いたか、所在が知れなかつたさうです。」

「へえ、聞けば聞くほど意外な話だね、すると廻り廻つて私の所持品を、義理ある仲の太郎が窃取してゐたのだね。」

「それのみならず、私を荒川へ突落さうとしたのも太郎が、國弘から頼まれて實行しかけた事まで明瞭に知れました。」

「へえ、知らない事とはいひながら、實に不思議な事ばかりだね。」

上野公園竹の臺に開かれた、文部省主催の美術展覧會は、東京といふ大都會の、

年中行事の一ツに計へられるほどの隆昌を極めて、年を逐ふ毎に、進歩發展を認識されるやうに成つた。殊に當年は新進畫家の傑作が多いといふ評判から、多大の人氣を陵り立て、開會當日から、殆んど滿員の觀覽者を吸収してをる。

今しも日本畫の第五室に陳列された、御室致親の筆に成つた、面影と題する畫の前に立つて、身動もせず一心不乱に畫面を瞞めてをるは、伊藤伯爵の令嬢露香であつた。

すると多くの觀覽者の中から、誰いふともなく、

「あの繪を眺めてをる女と、繪の中に立つてる女とは、同じ女だよ、寫真に撮つたよりも能く似てるぢやないか。」

といふ聲が傳つた。好奇は人の常態であるから、この聲を聞くと等しく衆人の視線は露香の一身に集注された。

なるほど能く似てる、して見るとあんな美しい顔をして、盛装を凝してをつても

モデル女だと見えるね。」

と甲がいへば、

「さあ、モデルとしては、餘りに上等過るから、何處かの令嬢を、モデルに頼んで描かして貰つたのかも知れないよ。」

「繪も美しいが、實物も美しいぢやないか、どうだ、あの顔の美しいことは……」

「顔ばかりぢやない、あの曲線美の整ふた姿は何うぢや、氣持を悪くさせるぢやないか。」

「幾歳だらう、若くは見えるが、八位には成るだらうね。」

「さあ、先づ六七八といふ所だね。」

「いくら自分の姿を描かれたとはいへ、なんだあの眺め方は、全で化石しさうぢやないか。」

と種々の噂するのであつた。露香は他の噂など耳にも入らない様子で、

「何ういふ精神で、お描きなすつたのか知ら……特に私の姿をお描きなすつたのは、何等かの意味が含まれてをるに相違ないわ、あの時のことを忘れないで、描いて下すつたのなら、哀心から感謝するけれども、只無意味に描かれたのでは真箇迷

誤するわ。」
「這麼事を考へながら、尙も去りあへず眺めてをると、

「露香さん。」

突然聲をかけられて、ハツと其人を見れば、誰あらう致親であつたから、忽ち時ならない色を染めて、

「まあ、お珍しいぢやございませんか。」

と打騒ぐ胸を制へつゝ、微笑みつゝいつた。

「ごうも御無沙汰して申譯がございません、漸く仕事を片附けましたから、お詫ながらお禮に伺ひたいと思つてをりますが、何だか敷居が高くて、まだ失禮してをり

ます。」

と挨拶した。

「御好評でお目出度う、今日は父に申戯れて故々拜見に來ましたわ。」

「えゝッ、それでは閣下御存じですか。」

「はア、昨日故々拜見に參つたんですよ。」

「然うですか、畫題と取材に困つたものですか、深い印象のあるものを描いて見ました、閣下は何といつてゐられましたか知ら……」

「散々私を申戯ふのですもの……困つて了ひましたわ。」

「どうも相済みません……今日はお一人で入來しやいまして！」

「は、學校の歸りに、黙つて廻りましたの、貴方は……」

「私も學校の歸りに寄りました。」

「ではお一人。」

「は、一人です、もうすつかり御覽なさいまして！」

「いゝえまだですが、今日は貴方のだけ拜見して、直に歸りますわ。」

「それでは、其邊まで御一緒に歸りませうか。」

「はお供致しますわ。」

二人は連立つて會場を出た。若い觀覽者はこの光景に、少からず刺戟されて、

「莫迦にしてるぢやないか、あの様子では曰くがありさうだせ。」

「嫉くなよ、貴様にだつて附いてる奴があるぢやないか。」

「奥山の化物とは比較に成らないから嫉かざるを得ないぢやないか。」

「あの青二才何者だらう。」

「莫迦だね、分り切つてるぢやないか、この書を描いた畫家だよ。」

「成程然ういへば、話の様子が然うらしかつたね、すると御室致親といふ畫家なんだね。」

すると傍にをつた一人の男が、

「あれは御室公爵の御子息ですよ、今日の新聞にこの繪の話が出てゐましたよ。」と告げた。

「然うですか、御室といふのは公爵の御室さんですか、して見ると今の令嬢も、いづれ身分の在る華族の令嬢でせうね。」

「無論然うでせう。」

「吁々問題にならない、我々とは社會が違ふのだからね、はゝゝは。」と笑ひつゝ去つて了つた。

扱又會場を出た、致親と露香の二人は、東照宮の裏手の、唯あるベンチへ腰を掛けて、俱に密かに語合ふのであつた。

「ですけれども御室さん随分だわ、私に恥しい思をさせて置いて、今更面影なんかお描きなさるんだもの、私一生お怨みするから、覺悟してゐらつしやいよ。」

と秋波を送つた。

「誤解しては不可せんよ、あの時の境遇は、あの手段を採るより外に萬全の策がなかつたから止を得ないぢやありませんか、しかし私が貴女の希望が厭で、あの手段を採つたか否やは、這度の面影で御想像が就くぢやありませんか、あれ以來、あの時の面影が、深く印象されてをればこそ、あの繪が出来上つたぢやありませんか。」

「それでは私の願ひは容れて下さいますんですか。」

「時節の來るのを待つ外なです、時節さへ到來すれば、今日は以前と違つて同族の事ですから、互の満足が得られやうと思ふのです。」

「けれども、御室家は同族中の御名門ですし、私の家は父の勳功に依つて、陞列された新華族ですから、戀の満足は得られないと思ひますが、如何なものでせう。」

「ですから時節を待つのです、目今はお互に中學や女學校に通つてゐる身の上ですから、結婚や戀愛を口にすべき時機ではありませんから、若し戀を遂げやうといふ御決心があるなら、私が大學を出て、公爵家を相續するまで待つて下さい。」

「私はいつまで、も待ちますけれど、萬一御兩親なり御親族から、御故障でも出た節は、貴方の御意見通りに成らないぢやございませんか。」

「だから私の意見が實行される、所謂公爵になるまで待つて下さいといふのです、公爵家を相續して、主人公と成つて了へば、必ず萬障を排して御約束を果します。」

「私、一生獨身で送る決心してゐた位ですから、十年でも二十年でも必ず待つてゐますから、切望希望を御聽容れ下さいまし。」

「しかし、それまでに良縁があつて、閣下からお勧めに成つた節は、拒絶なさる理由にお困りなさりは致ないですか。」

「それはどんな理由を設けても、屹度待つてをりますから必ず御安心を願ひます。」

「私を失戀の淵に沈めないやうに頼みます。」

「随分ですね、あんな愧しい事をいひ出すには、能々堪へられないからぢやありませんか。」

大團圓

せんか、那樣事は御安心下さいまし。」

「ね貴方、今朝の新聞紙を御覽遊ばしましたか、國弘さんが拘引されなすつたではございせんか。」

と咲子夫人が伊藤伯にいつた。

「それに就て、實は心痛の結果、内々探つて見たところが、彼の荒川に於て、佐分を苦めやうとした舊悪が露顯して、それが爲に拘引されたのだ、何しろ彼の事件は當時悔悟して謝罪した爲に、佐分も私に免じて寛容して下れたのだが、這度は佐分に害を加へやうとした惡漢の自白から拘引されたのだから、因果應報の然らしむる所で致方がないんだよ。」

「まあ左様でございませうか、それでは到底無罪といふやうな理にはならないでござ

いませうね。」

「取調べの結果、何う成り行くか知らないけれども、先づ十中の九までは、無罪になるやうな事はないね。」

「豊子さんや小兒さんは、何うなすつたんでせうね。」

「まだ朝鮮にをるであらうが、しかし實家が確乎してをるから、困るやうな事はな

いであらう。」

「ですけれども、今日では悔悟して佐官まで昇進なすつたほどでございませうから、何とかして救けられるものなら、救けてお上げなさいませんか。」

「それは徒事だ、惡因に惡果を結んだのだから、成行に任せる外はないさ。」

話半へ小間使が慌だしく入つて來た。

「申し上げます、唯今佐分様からお電話でございましたが、御室様が俄に御重患にお成り遊ばしましたから、御前様へ御相談申し上げなければならぬ事が出來したか

ら、直に伺ふから御待合せ下さいませうと、御申附けでございました。」

「然うか、近頃は餘程快方のやうに聞いてゐたのに、又お悪くなつたと見えるね、何事の相談か知ら……」

と思案する。

「左様でございませぬ、貴方様へ相談といへば、官衙の方の休暇でも頂きに来る位ではございませぬか知ら……」

「さあ那樣事かも知れないね。」

と夫婦が語合ひつゝある所へ、佐分誠也が入つて来た。見るより伯爵は、

「公爵が御重患だといふではないか！」

「はい、俄に御危篤な御容體に成りましたので、急いで御相談申したい儀が出来致しましたからお伺ひ致しました。」

「何事の相談ぢや。」

「餘の事ではございませぬが、致親君へ相續の件を遺言されると共に、配偶者を御指定に成つたところが、致親君がそれを拒絶されて、露香さんが貰ひたいといふ熱望を述べられた結果、それを御許容に成りましたが、閣下の御意見を聞いて見て下れ、願くばそれを定めてから、安心して死にたいと申されますので、其御願ひなり御相談なりに上りましたが、如何なものでございませう。」

伊藤伯爵は寸時思案した後、

「御室さんがそれを容された上は、私に異存はないから、君から宜しく傳へて貰ひたい。」

「それを承はつて、誠に満足致しました、既に危篤状態にゐられますから、それでは此旨を傳へて、安心されるやうに致します、いづれ改めて御願ひに上りますから今日は失禮致します。」

と其儘御室家に歸つて、瀕死の公爵へ傳へた。公爵はそれを聞くが否や、いとも安

心の色を浮べて、其儘永き眠に就いて了つた。

灰に聞けば、國弘も小栗も豫審に於て有罪の決定を與へられて、公判に附せられる事に成つたさうだ。太郎は無論である。

お
も
か
げ
終

げかもお
後

有所標作著

銀十五金價定
錢六金税郵

大正四年七月十日印刷
大正四年七月十五日發行

著作者 篠原嶺葉

發行所	印刷所	印刷者	發行者
東京市日本橋區前田町四番地 湯淺春江堂	東京市神田區松任町五番地 文會	東京市神田區松任町五番地 菅井十郎	東京市日本橋區前田町四番地 湯淺久米電

■ 家 庭 小 説 叢 書 ■

北島春石著	小山集川著	大澤一節著	小山集川著	小山集川著	北島春石著	北島春石著	篠原嶺葉著	篠原嶺葉著	北島春石著	小山集川著	篠原嶺葉著	小山集川著
添	蝶	女	し	潮	歌	紅	う	は	小	涙	誰	も
れ	の	ぎ	が	の	戀	梅	さ	つ	夜	の	が	つ
ぬ	ま	ら	ら	花	慕	白	し	づ	子	あ	れ	れ
仲	ひ	ひ	み	花	慕	梅	み	戀	子	と	罪	縁
北島春石著	渡邊默禪著	渡邊默禪著	花散里著	北島春石著	北島春石著	北島春石著	小山集川著	小山集川著	北島春石著	北島春石著	渡邊默禪著	渡邊默禪著
娘	俠	俠	誰	子	子	カチ	な	戀	憐	ち	男	男
一	達	達	が	寶	寶	ー	さ	の	れ	ぎ	狩	狩
代	磨	磨	子	寶	寶	シヤ	ぬ	迷	な	れ	後	前
	(後編)	(前編)	子	(後編)	(前編)	(復活)	仲	ひ	女の	雲	編	編
									一生			
□ 錢	六	金	各	稅	郵	錢	十	五	金	各	價	定
□ 本	美	判	六	四	給	口	麗	麗	釘	裝	美	便

996
996

